

報 特 攻 会
 平成12年5月

第21回特攻隊合同追悼式

4月6日靖国神社

献 吟

忠 魂 碑

万里従軍幾戰場

絶代の武勇辺疆に死す

花負いて空うちゆかん雲染めん

屍悔なく吾ら死すなり

屍悔なく吾ら死すなり

噫々従令一敗地に塗ると雖も

遺烈凜然何ぞ光りを失わん

君が為何か惜しまん若さくら

散りて甲斐あるいのちなりせば

散りて甲斐あるいのちなりせば

餘芳千載長えに滅びず

更に後人を使って心腸を正さしむ

あとにつつく者を信じて若人ら

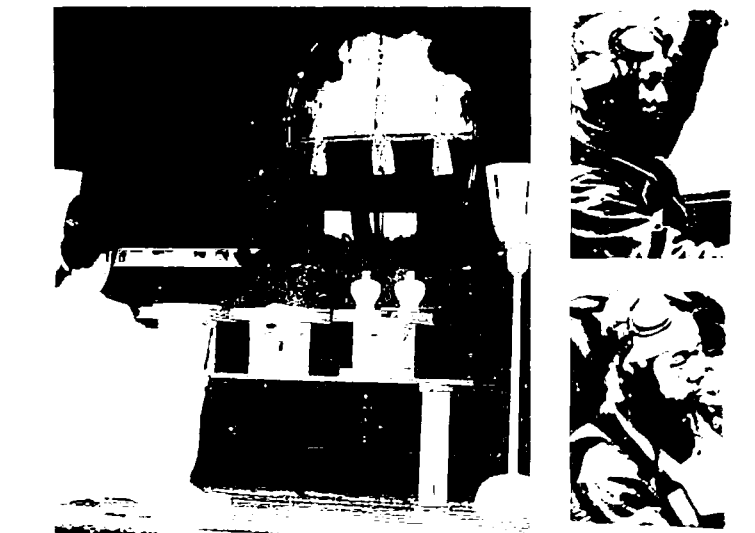
ゆきて帰らず春はめぐれど

ゆきて帰らず春はめぐれど

当年を回顧すれば感慨多し

忠魂碑畔斜陽に立つ

参列者 遺族 57
 会員等 316



第43号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電 話 03(3432)1090
 F A X 03(3432)5567

編集人 田 中 賢 元
 発行人 木 村 正 正

目 次

第21回特攻隊合同追悼式 1
 南九州特攻基地巡拝記 2
 建国記念の日奉祝中央式典参加 4
 遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情 5
 忘れ難い人たち 回天⑤ 21
 騎兵出身の特攻隊員② 24

人の性(さが) 26
 織田信長の故事に
 義烈空挺隊の出撃前を思う 26
 11年度事業報告 27
 会報別冊の頒布について 20
 靖国神社特別展 20

特攻隊追悼式に臨みて

九段の桜 柳引きて
 鎮まる御霊 温かく
 なごめ奉るか春の風
 心浄まる 神のいわ
 御国に嵐 迫るとき
 先駆け咲きし 桜花
 散りて残せし色と香は
 世を靖国と護りゆく
 共に誓いしかの友よ
 幽明分かち 半世紀
 額突く毎に 新なる
 念いを合はす 掌
 宮居に鎮まる我が友は
 匂うが如き 若武者よ
 手拍子とりて歌いたる
 一同期の桜 聞こえ来る
 かなしき命つみ重ね
 守り来りし 国なれや
 後継く人は如何ならむ
 幽騒の念の絶ゆるなし

南九州特攻基地

慰霊碑巡拝記

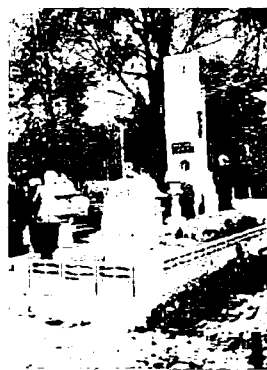
理事長 最上貞雄

当財団で南九州特攻基地慰霊碑巡拝団を募集したところ、ご遺族7名を含めて陸軍関係14名海軍関係12名計26名の方々が参加された。

コースは羽田より空路宮崎へ、宮崎より都城、串良、鹿屋、指宿、知覧、加世田の7ヶ所を巡拝、鹿児島より空路羽田へ二泊三日の旅であった。



宮崎鎮魂碑



都城慰霊碑



串良慰霊碑



鹿屋慰霊碑

宮崎特攻基地関係者兩柱の令名が刻まれた立派な碑が建立されていた。海軍の基地であったが、陸軍の7戦隊、98戦隊が海軍の指揮下に入り、魚雷攻撃や洋上航法等を習得した関係で、15名の陸軍航空兵の氏名も刻まれていた。空港には宮崎特攻基地慰霊碑奉賛会の野田純治会長、碑建立委員長であった松浦元二郎様、安田郁子様等数名の方々が出迎えて下さり、野田会長より歓迎の辞があり、松浦様よりこの基地並びに慰霊碑について、懇切な説明があり、一同感銘深く拝聴した。

同行者の一人に幹部候補生出身で現在宮崎県で真言宗のお寺の住職をしておられる小久保隆福様がおられ、読経をいただき、一同も協会より配布された般若心経と特攻平和首経を奉読し、焼香して心より特攻烈士のご冥福を祈り、その壮絶な純忠に改めて感謝申し上げた。

以下各地に於て小久保様のご指導に

て、読経焼香をして慰霊拝礼を行った。皆さんのお見送りの中、バスは都城に向け発車、一時間半程で都城の陸軍墓地にある特攻慰霊碑を参拝した。地元にてこの碑をお守りしている陸士57期の伊忠忠義様が出迎えて下さり、都城には東と西二つの飛行場があった当時の模様や当慰霊碑の由来等を拝聴した後、前と同様読経焼香をして、懇ろに拝礼をした。因みに焼香の台、お香等は皆世田谷山観音寺の太田賢照御住職よりお借り致したもので、協会の理事である広嶋文武様が終始持参、お世話を下さった。

都城に別れを告げ、バスは一路鹿児島県の串良に向った。串良では町長中島孝様と鹿屋より態々来られた海兵67期の肥田真幸様が出迎えて下さり、肥田様より中島町長の紹介があり、町長より串良の慰霊塔並びに平和公園の説明があった。広々とした立派に美しく整備された公園で慰霊塔も亭々と高く

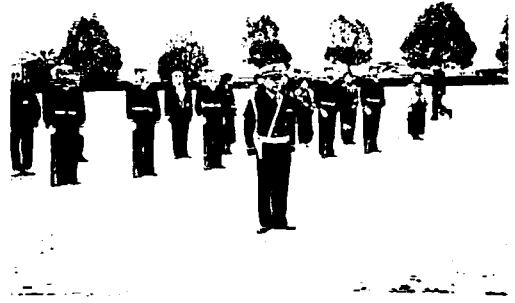
く常時両側に日章旗が掲揚され誠に特攻烈士を偲ぶにふさわしい慰霊塔であった。肥田氏がこの中島町長程特攻烈士の慰霊に熱心な方は他には見当たらないと語されたが、真に町長の熱意がこの様な立派な施設を造成されたのだと心より感銘した。

今夜は鹿屋のホテル大蔵泊まりであるが、中島町長は酒三升の土産持参で夕食時我々と種々懇談された。翌日は9時定刻、海上自衛隊鹿屋航空基地史料館到着、第一航空群司令小林秀至海将補、基地隊司令 藤原裕一等海佐、史料館長 山下博殿等多数の出迎えを受け史料館前にて一同記念撮影、この写真も帰る時までには出来上り、皆感激して頂戴した。講堂に入り資料館の映画で説明を受けた。昨日串良まで来ていただいた肥田様が史料館内を隈無く懇切丁寧に説明してくれた。史料館の見学を終り、車にて基地内を見学後特攻慰霊塔前にて海上自衛

隊儀仗隊並びにラッパ隊の部隊拝礼、それに合せて一同も拝礼した。岡の上の塔の下まで登り、改めて読経、焼香をした。ここでもまた至れり尽せりの接待にて全く感激をした。

昼前、鹿屋を辞し桜島熔岩道路を通り、フェリに乗り鹿児島市に向かったが、途中桜島で一寸した噴火があった。

磯庭園を見物の後、一路指宿に向かった。一寸小雨模様であったが、指宿の海軍水上機の特攻基地の慰靈碑を参拝した。水上機による特攻出撃とはあまり知られていなかったが、立派な碑が建立されており、且つ水上機基地の説明図面がありこれまでして特攻攻撃がなされたのかと感銘深く礼拝した。



慰靈参拝の儀仗隊

砂風呂で有名な指宿温泉「指宿コーラルビーチホテル」に宿泊した。

翌日は最も有名な知覧に赴き、知覧町の町長は出張中で、代りに助役の福元作男氏が寒い中出迎えに来て下さり、知覧特攻基地の話を伺った。「特攻平和観音」は陸海夫々二体を鑄造し陸軍の二体の一体は世田谷山観音寺に、他の一体は航空総軍司令官田辺正三大将と第六航空軍司令官菅原道大中将が陸軍最大の基地であったこの地知覧に是非祀りたいと奉持して知覧町に依頼したので始まりで、現在この様な立派な特攻平和会館が出来、沖繩で散華された特攻烈士103柱の霊を祭り、その遺影、遺品、遺書を始め、日本にはもう此処だけにしかない三式戦闘機、四式戦闘機の実物も展示され、全国より修学旅行の生徒や一般の方々の参観者は



指宿特攻基地の碑

既に100万人を超えたと聞いています。平和会館では、超ベテランの担当者の流暢な説明で皆感激し目頭を熱くし、ハンカチを目に当てる人が多数居られました。

知覧を後にして加世田市の万世特攻慰靈碑に参拝した。此処でも前加世田市長、現万世特攻碑奉賛会々長の陸士61期の吉峯良二氏が出迎えて下さり、加世田特攻基地に関し懇ろな説明をして下さった。碑の側に、複葉の練習機を形どった二階建ての平和会館が建設され、中に加世田沖で引揚げられた三座の海軍偵察機が波にただよう如く安置され、特攻烈士の遺影、遺書、遺品等多数が展示されており、拝観する者の涙をさそった。拝観を終り鹿児島空港より再度日航機で羽田に向け帰路に



知覧平和観音堂

着いた。今回のこの旅行では、現地の関係者が皆熱心に我々を接待下さり、各地立派な慰靈施設が市町村自治体を始め地元の方々の大変な熱意とご努力によってお祀りされており、特攻隊戦没者のご偉績はこの九州の土地がある限り末永く子々孫々に受継がれてゆくことを確信して旅を終った。



万世平和会館



万世慰靈碑

日本の建国を祝う会主催の 建国記念の日奉祝中央式典に参加して

本年も明治神宮会館に於て行はれ、
参列者は一二〇〇人の盛況だった。

記念講演は「神武建国を憶念する」と題し、出雲井品先生の話があり、ついで「奉祝の灯」天皇陛下御即位十年をお祝して」という映画が上映され、

最後は昔懐かしい「雲に聳ゆる」の歌を合唱した。政府主催の記念式典が何故行はれないのか。財団法人国民の祝

日を祝う会に行はせ、首相が来賓として出席するという姑息な態度で、独立

国と言えるだらうか。日比谷公会堂で行はれる式典に対し啓蒙するものが、

明治神宮会館のこの行事である。

式場正面の横断幕には、皇紀二千六百六十年と書いてある。同じ千支、つまり六十年前の昭和十五年は二千六百年で、祝賀行事は盛大に行はれた。そのときの歌、

紀元二千六百年

一、会鶏かがやく日本の
栄ある光身に受けて
いまこそ祝えこの朝

紀元は二千六百年
あ、一億の胸は鳴る

二、歡喜溢るるこの土を
しつかと吾ら踏みしめて

はるかに仰く大御言
紀元は二千六百年
ああ肇国の雲青し

三、荒ぶ世界にただ一つ
搖がぬ御代に生い立ちし
感謝は清き火と燃えて
紀元は二千六百年
ああ報国の血は勇む

かつてこの歌の如く躍動した日本人の、現状は何と情ないことか。口を開

けは謝罪とか反省とかばかり、国の歴史を否定する民族に未来はない。この

歌の一番にある「はるかに仰く大御言」とは何か、日本書記に依れば神武天皇

は辛酉(かのととり)の春正月の一日(旧暦)に即位せられたのであるが、

そのときの勅にいう。

大れ大人制を立てて、義必ず時に随ふ。苟くも民に利有らば、何ぞ

聖の造を妨げむ。且当に山林を披

払ひ、宮室を経営みて、恭みて

宝位に臨みて、元々を鎮むべし。上

は乾意の国を授けたまひし徳に答

へ、下は皇孫の正を養ひたまひし心

を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇

と為さむこと、亦可からずや。觀るに、大れ敵傍山、敵傍山、此には平瀬

慶夜摩と云ふ。の東南の橿原の地は、蓋し国の境区か。治むべし」とのた

まふ。是の月に即ち
有司に命せて、帝
宅を經り始む。

八紘一字とはこの勅
にある言葉だが、占領
下所謂神道指令により
使用を禁止され、今もつ

て呪縛から脱し切れず
にいるが、この大理想
を掲げずして日本の建
国を語ることはできな

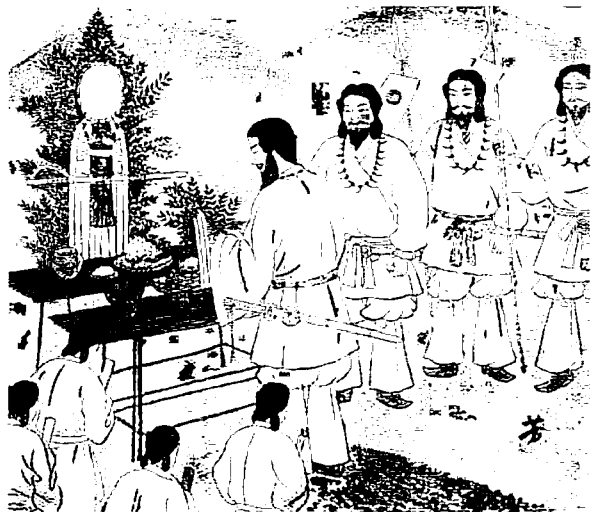
い。



満席の盛況



紀元節の歌合唱



出雲井品著日本の神話より

遺書遺詠に思ふ

特攻隊員の心情

まえおき

父母兄弟に寄せる情

故郷を恋うる懐い

後に続くを信ず

美しく散るといふ気持

死生観

靖国神社で会いませう

いとし子へ

我等が憶い

「付録」残された肉親の心のうち

「鳥の將に死なんとするや其の鳴くや哀し、人の將に死なんとするや其の言や善し」(論語泰白篇)とあるが、必ず死ぬときまわっている特攻隊員の言い残した言葉には何の虚飾もなく、これほど尊いものはない。ここにそれらを類別列挙してその心情を偲んでみよう。

文章として認めたものと詩歌とは、別に甲乙をつけられるものではないが、短い文面の中に全精神が籠っているものは詩歌に如くはないので、それを優先的に拾ってみることにする。詩歌と言っても残されたものは殆んど短歌で

ある。短歌には古来一種の技法がある。しかしそのようなことは問うところで

はない。支那の先哲の言に一詩ハ志ノ之ク所ナリ。心ニアルヲ志ト為シ言ニ発スルヲ詩ト為スとある。心に凝集したものが迸って詩となるのだと言っている。また我が国にても古今集の仮名序の冒頭には「やまとうたは、人の心を種として、万のこの葉とぞなれりける」と申している。

順序不同だが、それらを類別列挙してみよう。

詠者の陸海軍別について、下士官は官名によって判るが、特校は出身別によって判断されたい。陸士とあるは航空士官学校も含む。階級は出撃時のもの。

父母兄弟に寄せる情

母君よ嘆き給うな父君に
家の栄えをゆきて先づ告げむ

・石川誠三中尉 海兵72期22歳、人間魚雷回天搭乗員、伊58潜水艦にて19年12月30日大津島出港、1月12日朝グアム島アブラ港に對し回天発進、港内に突入し目的を達成したものと判断される。

思はじと思えどとかく思い出づ

故郷の母よ健やかにおわしませ

この人の歌はまだ沢山残っているが別の項に掲げる。

・新藤 勝曹長 義烈空挺隊奥山隊の一員、義烈空挺隊のことについては、隊長奥山大尉のところ述べる。
還り来ぬ身にしあれども父母に

告げずに行かんやまとをのこは

吉田松陰の処刑前に遺した歌「親思う心にまさる親心けふのおとづれ何と聞くらん」戦死の公報を受けたときの親の胸中を想えば、断腸の思いがあったのは当然。

・西尾常三郎少佐 陸士50期29歳、富嶽隊隊長、同隊は浜松飛行学校で編成

した陸軍最初の特攻隊で、ルソン島クラークを発ち比島海域の敵艦船に突入した。西尾機が突入したのは19年11月13日。

母君よ嘆き給うな父君に
家の栄えをゆきて先づ告げむ

・緒方 襄中尉 海軍飛行予備学生13期22歳、第一神雷部隊桜花搭乗員、平泉博士門下生、第一神雷部隊は20年3月21日鹿屋を発進したが、多数のグラマンの要撃に遭い桜花(ロケット特攻機)を切離す前に撃墜された。

襄中尉より特攻隊員志願の決意を打明けられた母三和代さんは、今生の別れに我が子の任地に赴いた。
うつし世のみじかきえにし母と子が
今宵一夜を 語りあかしぬ

これがその折の和歌である。そして帰宅後、襄中尉がひそかに母の袍に入れていた和歌

いざさらば我は御国の山桜

母の身元にかへり咲かなむ

を発見する。この時、母三和代さんは散る花のいざさよきをば愛てつつも

母の心は 悲しかりけり

と詠っている。(靖国神社編)

「いざさらば我はみくにの山桜」より)

・鷺見敏郎少尉 海軍飛行科予備学生14期23歳 神風特別攻撃隊第一七生隊

20年4月6日鹿屋基地出撃沖繩へ。
母上の優しき誠厚け継ぎて
永久に薫らん 大和御空に



夜前出撃隊空挺烈義

4月2日の日記に書かれている。

・中田 茂少尉 陸士57期21歳、第45振武隊、20年5月28日知覧出撃沖繩へ。

ふるさとに散るとも知らず我を待つ

老いたる母に 如何に告げなん

ふるさとに髪を残してこの心

わが父母に それと告げたり

・三浦恭一中尉 陸士56期22歳、皇魂隊長、20年1月8日比島リンガエン湾の艦船に突入。

空征かば雲染む屍今宵まで

我はぐくみし御親尊し

・光山文博少尉 京都葉専卒特操1期25歳、第51振武隊、20年5月11日知覧出撃沖繩へ。

たらちねの母のみもとぞしのぼるる

弥生の空の 春霞かな

光山少尉は朝鮮半島出身、初の名は卓庚鉉という。彼の母はその頃内地にいたのか、それとも朝鮮に在ったのか、知覧で特攻隊員に母の如く慕はれた鳥浜トメさんの語るところによれば、

「忘れもしません。出撃前夜の20年5月10日でした。光山さんは私の食堂(富屋)に『別れに来ました』と一人

でやって来ました。隊の持さんは帰られて私と娘二人の三人だけでした。光

山さんは悲しそうな顔をして『クニの歌をうたうから聞いてくれ』といいました。恥ずかしそうにかぶっていた戦闘帽を鼻のところにまでずり下げ、ささやくような声でアリランを歌いました。

顔は涙でくしゃくしゃでした。(特攻おばさんの回想/空のかなたに)より

・大谷邦雄少尉 京城大学海軍飛行予備学生14期23歳、神風特別攻撃隊八幡

振武隊、20年5月4日出撃沖繩へ。

たらちねの母のみめぐみおろがみて

仇艦の群 撃ちて碎かん

・広田幸宣一等飛行兵曹 甲飛10期21歳、神風特別攻撃隊葉桜隊、19年10月30日比島スルアン島沖。

国の為征く身なりとは知りながら

故郷にて祈る父母ぞ恋しき

・村川 弘大尉 海兵70期24歳、神風特別攻撃隊第二御橋隊、20年2月21日硫黄島周辺。

母上の御手の霜焼いかならんと

見上げる空に春の動ける

・鷲尾克巳少尉 一高特操2期22歳、第55振武隊、20年5月11日知覧出撃沖繩へ。

告げもせて帰る戎衣の我が肩に
もろ手をかけて笑ます母かも

白絹もてつつめる我子の骨抱きて
かへる夜空やさぞ長からん

・赤近忠三二等飛行兵曹 甲飛13期19歳、回天白竜隊、20年6月13日前進基地より沖繩近海へ。

梓弓征きて帰らぬ晴姿

育ての親は如何に見るらん

・根尾久男中尉 早大飛行予備学生13期24歳、神風特別攻撃隊刺水部隊梓隊、銀河、20年3月11日鹿屋出撃ウルシーに向う。

いさみ来て今に思へば悲しけり

なが年月の 父の思愛(子)

身をもって君に仕へし真心は
吾子ながらも 尊かりけり(父)

・小林敏男少尉 幹候8期23歳、誠第37飛行隊、20年4月6日新田原出撃沖繩へ。

故郷の梅をながめてさまよいぬ

これも遂に最後となりぬ

死出の旅と知りても母は笑顔にて
送りてくれぬ我くにを去るの日
広き広きホームに立ちて見送るは
母と妹と共に二人のみ

故郷を恋うる懐い

よく口ずさんだ歌「妻と兵隊」にある「遠く祖国を離れきて/しみじみ知った祖国愛/友よ来て見よあの雲を」この心情体験した者ならずともよくわかる筈。まして目前に死をみつめている特攻隊員なら、更に切実なものがあろう。

・井樋太郎少尉 航士57期21歳、石陽隊員、19年12月12日バゴロド発進、レイテ島バイバイ沖の敵艦船に突入。

井樋少尉の両親に宛た最後の手紙に

「神州不滅、信ずること厚きが故に、祈る心の切なるが故に、淡々たる心境にて征きます。我が父は神の父なり。

我が母は神の母なり。降る霜の白髪となるも、清くおはしませ」と書き残し、更に生い立ちから出撃の直前迄を流麗な七五調の長詩をもって綴ってあった。

七句一九節より或る長詩のうち故郷を懐うの情切々たる部分を抜粋すれば、
怒濤逆巻く玄海に
彼の白鶴の舞ふ如き
銀砂の濱と虹の松
幼き頃の思出は
素足で野山を駆け廻る
ああ大いなる氣をすひて
我は育てり十余年

緑に煙る筑紫野の

多布施の流れ清くして

空ゆく雲の影うつす

水をながめて啄木と

語り過せし日もありき

ああ故郷は紅葉して

秋の陽みてるたんばみち

朝な夕なの通學は

銀杏の並木白き道

茶の城のほりばたの

吹く秋風にさそはれて

しだけ柳の葉が落つる

あああの道をあの樹々を

逢か比島に偲びなん

故郷は楠のまち先哲の

道をたづねて此の我に

死ねと教えし葉陰の

うつぼつの氣を宿す所

ああ偉なるかな大自然

ああ偉なるかなその言葉

深きめぐみにいだかれん

いばらの道と人は言ふ

詭計の花の赤く咲き

母と歩きし田舎道

歩行し難き世の中を

一步步々に感じつつ

あああの土手にて食ひたる

冷たきむすびに降る涙

父の病の篤きとき

姉と指てし不動尊

幼き四人の集まりて

母に贈しゴム手袋

ああ我がなきあとも同胞は

一つ心に結ばれて

変るなかれと祈るかな

・石川誠三中尉 前出。

明日の日は戦い死なむ今日の日は

静かに故国の春を偲ばん

・日野真二少尉 陸士57期21歳、殉義

隊長、19年12月21日マニラ発進ミンド

ロ島沖の敵艦に突入。

わらべ歌うたい一日乙女子と

遊びし心 われ忘れや

これは故郷のことではないが、心情

的に通ずるものがあると思いいここに掲

げる。日野少尉が能代で訓練中に、門

間病院で家族同様の歓待を受けた。特

に一人娘の光子は少尉を兄のように慕っ

ていたという。

・牧 光広上等飛行兵曹 乙飛16期20

歳、神風特攻隊第二御橋隊、20年2月

21日八丈島発進、硫黄島近海の敵艦に

突入。

いざ征かん明日は御空の特攻隊

結ぶ今宵の夢は故郷

「故郷を恋うる思い」という標題で

遺詠を拾って見たが、それらは皆出撃

準備しているところから遠く故郷を望

むものであるが、ここに一つ特異なも

のがある。沖繩の敵飛行場に殴込みを

かけた義烈空挺隊には、沖繩出身の山

城金榮准尉がいた。この人は奥山隊が

まだ挺進第一聯隊の第四中隊当時から

中隊付准尉だった。出撃にあたり俺は

郷里で死ぬるとて喜をかくしきれなかつ

たという。不時着して生残った者の証

言によれば、出撃前ほかの隊員に対し

ても、新聞記者に対しても、声を人に

してそのことを語り、沖繩民謡まで聞

かせたという。但し今残っている遺墨

は次の通りである。

殉忠の至誠 魂 火玉となって敵

を焼く

副隊長渡部利夫大尉の機に乗り嘉手

納に向ったが、米軍の資料では目標に

到達していないらしい。

後に続くを信ず

「後に続くを信ず」とは、特攻隊員の間でよく言い交された言葉である。

余談ながらこの言葉を最初に言い残したのは、ガ島で戦死した第38師団歩兵

第28聯隊中隊長若林東一だと伝えられている。この人は下士官から士官学校

を受験して予科に入った努力家で、52期として卒業するときは恩賜という秀才でもあった。大東亜戦争初期の香港

攻略では、九龍半島の要塞に対し第23軍では正攻法による攻略を準備してい

るときに、将校斥候に出た若林は敵陣地の弱点を看破し、自分の中隊を率いて突入し、敵陣の要衝を奪取してしま

った。これを知った聯隊、ついで師団は急遽計画を変更して攻撃前進に移り、敵防禦線を突破した。九龍半島の攻略を一週間早めたことになる。

この師団はジャワ進攻作戦を経て、17年11月にガ島に上陸したが、既に防

戦一辺倒で、若林中隊は与えられた陣地を一步も退かず、乏しきに堪えて戦

い続けた。その間若林は日記を欠かさず書いたが、その中に「後に続くを信ず」の語がある。年が明けて「元旦や糧なき春の勝いくさ」の句もある。

ガ島残存部隊は、18年2月1日から7日にかけて海軍艦艇で撤退するが、



山城准尉

その前の1月14日に若林は戦死する。香港攻略及びガ島の戦闘と二回に亘り、彼は個人感状に輝いている。

だいぶ前おきが長くなったので、特攻隊の本論に戻る。爆装の小型機の体当りをもって巨艦を沈めることは、元来不可能のことだったが、士気を鼓舞する為上下を挙げて轟沈轟沈と叫んでいた。もっともそれ以外に戦術は既になかった。また仮に一機一艦を沈め得たとしても、それが直に戦捷に繋がると思えなかった。そのようなことは第一線の将兵にもわかっていた。然らば己の死の価値は何なのか。

大石政則少尉は東京帝国大学法学部二年在学中に学徒動員で海軍に入り、第14期飛行予備学生となり任官、八幡神忠隊に属し、20年4月28日97艦攻に搭乗し串良を発進、那覇近海の敵艦船に突入散華した。彼が母親に宛てた遺書の一節、

うが、ここに特攻の意義を認めていたのである。

後に続く者に託する気持の充溢しているのを、義烈空挺隊員の書き残したものに多く見ることが出来る。この部隊は当初はサイパン攻撃の為に19年12月に編成されたのであるが、硫黄島中継ができなくなり取りやめとなった。じ束特攻隊のまま訓練を重ねること半年、5月24日になって沖繩特攻を容易にする為、沖繩の敵航空基地覆滅に使われた。一時的憤激により死地に飛込むのではなく、長い間特攻隊であり続け、その間心の寄りどころは何だったのか、自分らの死が後世を奮い立たせることに価値を認めていたのであろう。

「一二三〇発進、沖繩周辺の敵輸送船に対し痛快なる突入を遂行します。仮令途中にて墜されることがあつても、戦果はなくとも、二十代の若武者が次から次々と特攻攻撃を連続し、ますらおの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りぬくことができれば幸ではありませんか」

突入した。梶原少尉はその一人である。魁けて梅と我が身の散りゆけば 後に続かん 桜ばなかな

・棟方哲三少尉は梶原少尉と同じく中野学校出身である。入営前小学校の訓導だった。健軍を出撃する直前一人の新聞記者を呼びとめて言った。「私の今生の願は、もし叶うことなら私の今の気持を私の教え子、いや全国の学童に伝えて征きたいと思うのですが、それは叶わぬことなので、ここに書き留めておきました」と言って手渡した紙片には、

全国ノ学童ニ寄ス
義烈空挺隊 棟方少尉
俺ガ行クノ!
俺ガヤル!!
俺ニ続ケ!!
コノ意気デ勝メ
コノ意気デ勝テ

散る桜残る桜も散る桜 兄に後続を望む。

・梶原哲三少尉 義烈空挺隊には中野学校出身者が一〇名いた。将校八名と通信特技の下士官二名である。この人はサイパンに諜報員として潜入する為、義烈空挺隊に配属されたのであるが、サイパン空挺作戦が取りやめになった後そのまま所属し、最後は沖繩に

なろうとした。幾度か志願し99襲の第64振武隊の隊長となり、若い操縦者8名を連れて出撃散華した。「愛するわが子、倫子並に生れ来る愛児へ」という遺書はあとから紹介するが、次の歌が添えてあった。

わがあとに続かんものは数多し 固く信じて 特攻は征く

また「出身地山形の学徒、学童へ」
という遺書もある。その中に「次の日本を背負って起つのはあなた達だということもよく分かっていますね。私達が特攻隊として御国の為喜んで散ってゆけるのは、後に数多くの皆さんが続いてくれるのを堅く信じているからです、今の皆さんであれば必ず出来る

・荒川宣治少尉 東京農大特操1期24歳、第52振武隊、20年5月25日知覧出撃沖繩へ。

我が後に頼もしき者の続くこそ 喜びのみて我は征くなり

平和な今の世の中、国を思う精神だけでなく後もに続かねばならぬ。それが現状はどうか。

美しく散るといふ気持

誰の作かわからぬが比島における海軍の神風特攻隊が発進した頃、

今日咲きて明日散る花のわが身かな
如何でその名を清くとどめん

という歌が、特攻隊員の間口に口伝えられたという。お国の為命を投出すのは美しいことだと思いがあつた。

第二挺進団(通称高千穂部隊)がルソン島のクラーク地区でレイテ空挺作戦の準備をしていた時、この地区には多数の飛行場があつて、海軍の先陣敷島隊は10月25日マバラカットを発進し、陸軍の一番手富嶽隊も11月7日クラークを発進した。そのようなことが近傍の南サンフェルナンドにいた高千穂部隊にも伝わってくる。レイテ空挺作戦は12月6日に行われることになった。

主力はブラウエン飛行場群に降下するが、敵の中核飛行場タクロバンにも選抜した小部隊を降下させるが、これは全く収容の見込みがないので特攻隊として志願者を募集した。N曹長は真先に手を挙げてこれに加わつた。この人の搭乗機はレイテ湾に撃墜され、一晩浮游し敵に捕らえられ生き長らえるのだが、戦後当時の心境について語つた。

どうせ死ぬなら華々しく戦つて死のう。特攻隊と聞いて美しさを感ぜたという。

そのような思いを詠い込んだものは数多く見出せる。

・若本益臣大尉 陸士53期27歳、万葉隊長。万葉隊は富嶽隊と共に陸軍最初の特攻隊、99双軽、銚田で編成しルソン島リパまで進出したが、19年11月5日隊長機は要務飛行中グラマンの攻撃を受け撃墜され搭乗員全員戦死した。

武士は散るもめでたき梅の花
花をも香をも 人ぞ知るらん

・川島 孝中尉 航士56期23歳、万葉隊岩本隊長と同乗戦死。

九重の御階の花と散らんこそ
我れもののふの思いなりけり

・高橋安吉一等飛行兵曹 丙飛12期22歳、神風特攻隊月光隊、19年12月28日ミンダナオ海航行中の輸送船団に突入。

大空に国の鎮めと散り行かん
大和男子の 八重の桜と

・壁書 読人不知 レイテ空挺作戦の際挺進第3聯隊の宿舍となつていた南サンフェルナンドの製糖工場の壁に、

次の歌が書き残されていた。
花負いて空うち征かん雲染めん
かばね悔なく吾等散るなり

・棟方哲三少尉 義烈空挺隊 前出。

君が代はちよよろづよといく春も
匂ひ忘るな 若さくら花

・今村美好曹長 義烈空挺隊 前出。
奥山に名もなき花と咲きたれと
散りてこの世に香りとどめん
(奥山とは隊長名)

・諸井 守曹長 義烈空挺隊 前出。
大和桜散りゆくときは君が為
何をかなさん なさてやむべき

・増田利雄軍曹 少飛11期21歳、飛行第105戦隊、20年4月11日台湾宣蘭発進、沖繩中城湾へ。
散るために咲いてくれたか桜花
散ることそのものの見事なりけり

・小室静雄少尉 横浜高商飛行予備学生13期23歳、第一護皇白鷺隊、20年4月6日串良出撃沖繩へ。
糸ある国に生れしこの思は
桜の花と散りて返さむ

・小林昭二郎二等飛行兵曹 甲飛12期20歳、第一護皇白鷺隊、20年4月6日串良出撃沖繩へ。
散りきはは桜の如くあれかしと
祈るは武士の常心なり

・藤村 勉二等飛行兵曹 乙飛18期19歳、第一護皇白鷺隊、20年4月6日串良出撃沖繩へ。
咲く桜風にまかせて散りゆくも
己れの道ぞ頼みはせじ

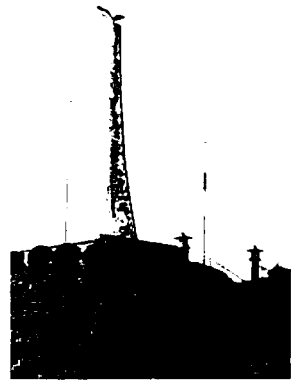
・長島義茂二等飛行兵曹 甲飛12期20歳、第一護皇白鷺隊、20年4月6日串良出撃沖繩へ。
散る日まで静けく薫れ敷島に
雄しく咲きしますらおの花

・海田茂雄少尉 愛媛師範飛行予備学生13期20歳、第一護皇白鷺隊、20年4月6日串良出撃沖繩へ。
いさぎよく散ること武士の道と知れ
患を受けし君が御為に

以上五首はどれも同一部隊で、4月6日串良を出撃しているが、大隅半島中部の串良では桜は散る頃、この人達の心情は痛いほどわかる。現在飛行場跡には高い碑が立ち、三千本の桜が植えられ、桜の名所となつている。本土の桜前線はここから始まるとされる。

尊え建っている塔の上には羽を拡げた鳩がしつらえているが、手前の慰霊橋の上で塔に向かい拍手を打つと、塔の上の鳩が「グググ」と鳴く。それはここを発つた三五九柱の特攻烈士の心答か。

答か。



串良の碑

死生観

古来我が国に於いては死生観について優れた武將や高僧の寓話が伝わっている。例えば次のような話もある。後世の作り話かも知れないが、感銘深い。桶正成は湊川の一戦を控え出陣にあたり、日頃帰依していた楚俊禪師の許に行つた。正成が禪師に向かつていうには「生死交謝の時如何」愈々討死のときが参りました、如何に心得たらよろしいでしょうかと訊ねた。そのとき禪師の答えは「兩頭俱に裁断し、一剣天に倚つて寒し」生きるのと死ぬのとの相対的に考えていると、いつまでも迷いは去らない。生死兩方俱に捨て去れば、明鏡止水の境地になれるのだ。正成はもう少し説いてもらいたかったのだらう「畢竟如何」ギリギリ結着のところどう決心したらよいでしょうか。これに対し禪師は「喝！」と一声発しただけだったという話。

・吉沢久與飛行兵長 乙特飛1期18歳
第三御楯七〇六部隊、20年4月7日宮崎出撃沖繩へ。
山桜散り行く時に散らざれば
散りゆく時は既に去りゆく
同じような心情の現れは他にも見られる。義烈空挺隊の阿部忠秋少尉は色紙に書き残した。
「散れ散れ散るならバツと散れバツとね」この人は「後に続くを信ず」の章で出した梶原哲己少尉と同様、中野学校出身者である。

・岸 誠一少尉 関西大特操1期24歳
第43振武隊、20年4月12日知覧出撃沖繩へ。
後れじと散りゆく花ぞわれもまた
大和島根に香りとどめて

死生観などということは元來筆舌には尽くせないがどんな言葉が残されていたらどうか。
・新妻幸雄少尉 陸士57期21歳、第3独立飛行隊、義烈空挺隊の飛行隊で、20年5月24日健軍を発つて沖繩に向かった。

侍つありて眺むる月の涼しさよ

・山本三男三少尉 幹候9期22歳、飛行第4戦隊の回天制空隊(体当たり専任部隊)長、20年4月18日大刀洗上空においてB29に体当たり撃墜戦死。
「散る時が浮ぶときなり蓮の花」
下関市小月の蓮成寺にこの句碑がある。

・原田 榮少尉 早稲田大学卒特操1期26歳、第27振武隊、20年6月22日都城東飛行場出撃沖繩へ。
「野畔の草召出されて桜哉」

野畔の草とはかつてよく言われた草の桜の華々しさと、散り際の潔さを意識するのであろうか。
第27振武隊は特攻隊として20年2月14日に編成され、当初は比島に行く苦だったのが戦機を逸し都城で一時待機した。その後第5航空軍の所屬となり、南京の飛行場で特攻の訓練をしていた。

機種は四式戦である。ところが5月になって第6航空軍に所屬替となり、再度都城に転進し、6月22日特攻出撃という苦難の途を辿った。
この句の真筆は知覧の特攻会館に展示されているが、転進の途中熊本県の菊池飛行場に立寄ったとき書いたものらしい。

27振武隊の絶筆集に原田少尉は――

征くものは気易い 残るものの心情にはホトトギスの慟哭がある 情は涙である そして愛は切ない されど忠はさらに至上だ 祖国よ永久に幸あれ 幸あれ――と認めている。

・大塚農夫少尉 中央大学専門部卒、海軍飛行専習予備生徒1期23歳、20年4月28日第二国分出撃沖繩へ。
妹に与えた日記風の手記がある。その一部(「白雲にのりて君還りませ」特攻基地第二国分の記)より)
四月二十七日

(途中から)愛機は悠然として爆弾を積んでいる。これが皆、木っ葉微塵となるんだからな。人間の棺桶として、百万円はちよつと豪勢である。

出撃は明日午後三時と定まった。夕方敵地へ着く。いま午後十時、午後飛行機を整備して、夕食後別離の盃を挙げた。

明日にそなえて早く寝る。ここへ来てから十二時前に寝たことなし。今日は早く寝る。おやすみなさい。
春の月が美しい。明日は満月だ。

願わくば母艦の上に砕けなむ
その卯月の望月の頃
本当におやすみなさい。
父上、母上、おやすみなさい。
姉さん

淳子、知子おやすみなさい。
最後の眠りに就きます。

四月二十八日

今日は午前六時に起きて清々しい山頂の空気を吸った。今日やることは何もかもやり納めである。

搭乗員整列は午後二時、出発は三時過ぎである。

昔のことがいま俺の眼前を走馬燈のように順序不同に出てくる。楽しいこと、苦しいこと、俺の生活は僅か二十四年と言いながら、決して七十、八十の老翁のそれに劣るまい。

要するに爆弾で死ぬ者もいる。自動車に刎ねられて死ぬ者もいる。三月初の東京空襲では、本所、深川、浅草と、七万人余も焼死したとか。死を問題にしないのが現代の常識となつて来た。外では蟬が鳴いている

「出撃のわが行祝う蟬しぐれ」

昨日も慰問団が来たそう。ちょうど俺達は飛行場で整備していたが、彼等は帰るとき飛行場の端で、われわれの方を向いて、土下座して拜んで成功を祈つて行ったそうだ。

拜まれるのが俺だとは、どう考えても不思議だ。そう聞かされると、必ず巧く命中せねば申訳ないと思つた。

(中略)

午前十一時、これから昼食をとって

飛行場へ行く。飛行機の整備で、もう書く閑暇がない。

これでおさらばする。

乱筆、乱文いつものことながら勘弁乞う。

皆元気でゆこう。

大東亜戦争の必勝を信じ、

君達の御多幸を祈り、

いままでの不孝をお詫びし、

さてさて俺はニッコリ笑つて出撃する。

今夜は満月だ。沖縄本島の沖合いで月見しながら、敵を物色し徐ろに突っ込む。

勇敢に然も慎重に死んでみせる。

再拜

辰夫

・大出博紹少尉 特操二期22歳、飛行第19戦隊、4月11日台湾宜蘭出撃沖縄へ。

出撃の前日と当日であろうか、次の通り四百字詰原稿用紙にペンで書き残している。

色々有難うございました。

別に言うこともありません。

唯有難くうれしくあります。

最後の時まで決して御恩は忘れませ

ん。

月みな事しか出て来ません。

姉妹の皆さん、

いよいよ本当にお別れ。

今でも例のごとくギャギャ皆とさわ

いでいます。哲学的な死生観も今の

小生には書物の内容でしかありません。

国のため死ぬよろこびを痛切に感じて

ています。

在世中お世話になつた方々を一人一人

人思い出します。

時間がありません。

ただ心から有難うございました。

笑つてこれから床に入ります。

オヤスミ

あんまり緑が美しい

今日これから

死に行く事すら

忘れてしまひそう。

真青な空

ぼかんと浮ぶ白い雲

六月の宜蘭は

もうセミの声がして

夏を思わせる。

作戦命令を待っている間に

小鳥の声がたのしそ

「俺もこんどは

小鳥になるよ」

日のあたる草の上に

ねころんで

杉本がこんなことを云っている

笑わせるな

本日一三時三五分

いよいよ宜蘭を離陸する

なつかしの

祖国よ

さらば

使いなれた

万年筆を「かたみ」に

送ります。

楚俊禪師のいう両頭を截断してこの

境地に到達したのか。

禅語で始めたこの章、禅語をもって

結びとしよう。甲州塩山慧林寺の快川

和尚は武田氏の法要をやつたとて、織

田信長に一山の僧侶全員と共に山門の

樓上で焼殺された。そのとき紅蓮の炎

の中で、偈に曰く。

「安禪何ゾ必ズシモ山水ヲ須ヒン

心頭ヲ滅却スレバ火モ亦タ涼シ」

先に紹介した特攻烈士達、禅僧のよ

うに難しい言葉は使はずとも、それ以

上のものがあつたと思う。

靖国神社で会いましょう

靖国神社に祀られることは誰もが念頭にあったので、靖国神社とか九段の文字は遺詠や遺書の中の至るところに見かける。先ずは自分が戦死したら魂は靖国神社に行くのだと言っているもの、これは他人に言うのではなく、自分自身に言いきかせているのだろう。

・巽 精造少尉 幹候9期24才、64振
武隊、20年6月11日万世出撃沖繩へ
俺の住家は九段ときめた
しばし浮き世は仮のやとよ

・若杉正喜伍長 少飛14期20才、60振
武隊、20年5月4日都城東出撃沖繩へ
靖国の桜となりて煮る日の
袴を胸に 私めて飛立つ
海軍の航空特攻は一機に二人搭乗したものが多くが、陸軍は殆んど一人である。孤独の死の淋しさを克服する為かこの種の歌は多い。

次は同僚と一緒に靖国神社に行こう
と呼びかけているもの、
貴様と俺とは同期の桜／離れ離れに
散らうとも／花の都の靖国神社／庭の
栞て咲いて会おう”
出撃前に必ず唱われた歌である。

・木村 実少尉 幹候10期23才、海上
挺進第10戦隊、20年7月19日ルソン島
地上戦闘で戦死。
憂国丈夫大義 九段社頭謝久闊

さて、このように靖国神社に祀られているから、肉親の者に会いにきてくれと言っているものも少くない。

第一神風特別攻撃隊大和隊の植村眞久少尉の愛児に残した手紙には——お前が大きくなって父に会いたいときは九段へいらっしやい。そして心に深く念ずればお父様の顔がお前の心の中に浮かびますよ——と言っている。

次は遺書の末尾に自分は靖国神社に
いることを告げているもの、
・関 三郎軍曹 義烈空挺隊奥山隊
出撃にあたり遺髪と遺爪を入れた封筒に、次の一文を同封した。
「大命降下勇躍征途に就きます。今迄の重々の不孝は何卒御許し下さい。いさぎよく散る覚悟です。何も思い残すことはありません。
よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん靖国の宮—
・古野繁実中尉 海兵67期24才、真珠
湾攻撃の特殊潜航艇、16年12月8日ハ
ワイで戦死。

(父に遺した句)

靖国で会う嬉しさを今朝の空へ

・近藤 豊伍長 少飛15期18才、第III
振武隊、20年6月3日知覧出撃沖繩へ
森沈の空は青空靖国の
笑顔で迎える母の面影

・高村統一郎少尉 特操1期27才、第
112振武隊、20年6月3日知覧出撃沖繩
へ。
我がつとめ果して逢はん九段坂
桜の庭で 妹の待つらん

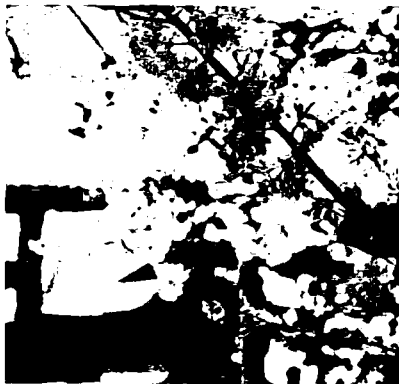
次は特攻戦死者ではないが、19年当時
時鋒田教導飛行師団付だった木下栄寿
少尉に「原町特攻隊の歌」というのが
ある。この頃原町関係者から特攻隊が
何組も編成されて出ていったので、陸
士57期の木下少尉も特攻隊編成要員だっ
たが、満州の23教育飛行隊の教官に転
出し、最後にはソ連の侵攻に遭い脱出
したが途中で戦病死してしまう。さて
木下少尉の作った歌は、

一、さらば元気でいておくれ
永の別れが 明日となる
恋の原町 あとにして
夢は爆音 あ、消えてゆく
二、二度と会えない二人なら
胸の写真が マスコット

晴れの 特別攻撃隊
君と一緒に ああ体当たり
三、見事 敵艦 沈めたら
笑って死んだとほめてくれ
会いに来てくれああ九段坂

泣いてくれるな これお前
白木の箱が 届いたら
抱いておくれよああ思出し
誰に向かって言っているのか、感銘
深い歌である。
このような御祭神の意を受けて、肉
親である遺族の心情はどうであったか。
一首紹介して結びとする。

一字隊天野三郎少尉(19年12月5日
比島方面で航空特攻戦死)の妹天野和
子の歌、
靖国の社に向いて合掌す
レイテの島に散りし兄見ゆ



いとし子へ

十代、二十代で散った特攻隊員は、始どが独身で、子供のある人は極めて少なかったが、ここに我が子に対する遺書の残っている三人について、遺書の全文を掲げ、その心情を偲んでみる。

・久野正信中尉 少候22期29才 義烈空挺隊の飛行隊(第3独立飛行隊)で20年5月24日健軍を発進沖繩に向かう。この部隊の戦死認定が6月15日なのでそれまでに大尉に進級していた。戦死後申佐となる



五才の長男と二才の長女がおり、文字を習い早く読めるようにと、片假名で書かれている。

正憲 紀代子へ

父ハスガタコソミエザルモイツデモオマエタヲ見テイル、ヨクオカアサンノイイツケヲマモツテオカアサンニシンパイヲカケナイヨウニシナ

サイ、ソシテオオキクナツタナレバジブンノスキナミチニスミリップパナニッポンジンニナルコトデス、ヒトノオトオサンヲウラヤンデハイケマセンヨ。「マサノリ」「キヨコ」ノオトオサンハカミサマニナツテフタリヲジツト見テキマス。フタリナカヨクベンキョウヲシテオカアサンノシゴトヲテツダイナサイ。オトオサンハ「マサノリ」「キヨコ」ノオウマニハナレマセンケドモフタリナカヨクシナサイヨ。オトオサンハオホキナジユウバクニノツテキヤゼンブヤツケタゲンキナヒトデス。オトオサンニマケナイヒトニナツテオトオサンノカタキヲウツテクダサイ。マサノリ
キヨコ フタリへ

・渋谷健一大尉 前出



出撃に際して倫子と生まれる愛児へ

父は選ばれて攻撃隊長となり、隊員十一名、年齒僅か二十才に足らぬ若桜と共に決戦の先駆となる。死せずとも戦に勝つ術あらんと考うるは常人の浅はかなる思慮にして、必ず死すと定まりて、それにて全軍敵に総体当りを行ひ、尚且つ、現戦局の勝敗は神のみぞ知り給ふ。真に困難といふべきなり。父は死にても死するにあらず、悠久の大義に生るなり。

一、寂しがりやの子に成るべからず母あるにあらずや、父も又幼少にして父母を病に亡したれど決して明るさを失はずに成長したり。まして戦に出て壮烈に死すと聞かば口の本の子は喜ぶべきものなり。父恋しと思はば、空を視よ、大空に浮ぶ白雲にのりて父は常に微笑で迎ふ。

二、素直に育て、戦勝つても困難は去るにあらず、世界に平和がおとづれて万民太平の幸をうけるまで懸命の勉強をすることが大切なり。二人仲良く母と共に父の祖先を祭りて明るく暮らすは父に対して最大の孝養なり。

父は飛行将校として榮の任務を心から喜び、神明に真の春を招来する神風たらんとす。皇恩の有難さを常に感謝し世は変るとも忠孝の心は片時も忘るべからず。

三、御身等の母はまことに良き母、父在世中は飛行将校の妻は数多くあれども、母程日本婦人としての覚悟ある者少し。父は常に感謝しありたり。戦時多忙の身にして真に母を幸福にあらしめる機会少く、父の心残りの一つなり。御身等成長せし時には父の分まで母に孝養つくさるべし。之

父の頼みなり現時敵機爆撃の為大都市等にて家は焼かれ、父母亡びし少年少女数限りなし。之を思へば父は心痛極りなし。御身等は母、祖父母に抱かれて真に幸福に育ちたるを忘るべからず。書置く事は多けれど、大きくなつたる時に良く母に聞き母の苦勞を知り決して我儘せぬやう望む。

・植村眞久少尉

海軍飛行予備学生13期25才 神風特攻隊大和隊 19年10月26日スリガオ海峡洋上で戦死
愛児に遺した手紙

素子

素子は私の顔をよく見て笑ひましたよ。

私の腕の中で眠りもしたし又御風呂に一緒に入った事もありました。

素子が大きくなつて私のことが知りたいときは、お前のお母さんが佳世子

叔母様に私のことを良く御聞きなさい。私の写真帳も御前の為に家に残して在ります。

素子と言ふ名前は私が付けたのです。素直な心やさしい思ひやりの深い人になる様にと想つて、御父様が考へたのです。(略)

私は御前が大きくなつて、立派な花嫁さんになつて、幸になるまで見届けたいのですが、若し御前に私を見知らぬままにしてしまつても決して悲しんではなりません。御前が大きくなつて父に会ひたいときは九段(註：靖国神社のこと)へいらつしやい。そして心に深く念ずれば必ず御父様の顔がお前の心の中に浮びますよ。

父は御前は幸せ者と思ひます。

生まれながら父に生写しだし、他の人々も素子ちゃんを見ると眞久さんに会つて居る様な気がすると良く申されて居た。又御前の御祖父様御祖母様は御前を唯一つの希望にして御前を御可愛がり下さるし、姉様も又御自分の全生涯をかけてただただ素子の幸せをのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一の事あるも親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身辺を護つて居ります。先に言つた如く素直な人に可愛がられるやさしい人になつて下さい。

お前が大きくなつて私のことを考へ始めた時に、此の便りを読んでもらひなさい。

昭和十九年〇月吉日

父

植村素子へ

追伸 素子が生れた時オモチヤにして居た人形は御父様が載いて自分の飛行機に御守り様として乗せて居ります。だから素子は御父様と一緒に居たわけです。素子が知らずに居ると困りますから教へて上げます。

素子殿

父



素子さん、愛児素子さんを抱いて

我等が憶い

あだし野にたふれし人のいさをしは限りなき世に その名残さむ

19年12月21日マニラを出撃し、ミンロ島沖の敵艦に突入した殉義隊長日野二郎少尉(陸士57期)の遺詠である。

我々はいつもそのような気持でいる。

特攻隊員の精神を世に鼓吹することが我が協会の使命である。然るに何ぞ、かくばかりみにくき国となりたれば

ささげし人の ただに惜しまる

ある遺族の嘆きの歌と聞く。我々は申訳ない気持で一杯である。特攻隊員があのような精神になり得たのは、軍隊教育も与つて力があつたらう。当時の戦局や社会情勢も推進力となつたらう、しかし根底をなすものは幼時からの教育にあつた。死んでもラッパを口から放さなかつた木口小平の話は、小学生に至大の感作を与えた。沈んだ潜航艇の中で認めた佐久間艇長の遺書を教科書で読み、児童は奮い立った。それを知らない年齢層の国民の多くは既に精神的敗者となつてしまつた。

我々は慰霊慰霊といつて玉串を捧げたり、焼香したりしているが、そんなことでここに掲げた二首の歌に應えることはできない。戦後五十年、日本民族はこのように崩れにさせられてし

まった。五十年かかつてさせられたのだから、直すのには五十年はかかるだろう。我々老骨はその方向だけでも与えて死ななければならぬ。

花の都はやすくにの

庭の梢で咲いて会おと

誓いし友は神鎮まり

額づく面は彫り深し

九段の桜 たなびきて

明眸皓齒 まゆ秀いで

我が目底によみがえり

呼べば答えん笑み湛え

英魂ここに 鎮まりて

遺香に副はぬ現し世に

我等が義憤絶えざるも

見守り給え 末ながく



〔付録〕

残された肉親の心のうち

肉親の人達が当時残した詩歌や手記
でその心情を偲んでみることも、特攻
戦没者の精神を顕揚するてだてにもな
るかとも思い、ここに収録してみる。

○亡き人を慕う気持ち

・大井隆夫少尉の母堂サクさん

やむわれを枯梗手折りきて慰めし
優しき吾子は永遠にかへらず

大井少尉は陸士57期、石賜隊19年12
月5日バゴロド出撃、スリガオ海峡の

敵艦に突入、次の遺詠がある。

よしやよし世を去るともわが心
御国のためになお尽さばや

・井樋太郎少尉の弟井樋弘典氏

故郷の五月の楠の木洩日を
君住む海に送り届けむ

井樋少尉(前出)には次の遺詠があ
る。

数ならぬ身にはあれども目の木の
歴史書くてふその一しづく

・牧野顕吉少尉の姉丸田むらさん

見る限り菜の花そよぐ志布志原
ここより翔びて帰らぬ弟

・林 義則少尉の許婚者小栗楓子さん

亡き人のいまはの際の足跡を
残し給ひし知覧恋しく

19年12月7日バゴロド出撃オルモック

・石川一彦大尉 少候22期28才第62振
武隊長 20年4月3日6航軍司令部に
連絡の為要務飛行中殉職 妻ふさえさ
んの歌

見せたき子つげたき思ひ抱き来し
夫との会いは幻と消ゆ

遺品の手帳繰れども特攻の文字なく
ト号という暗号今にして知る

石川大尉の歌

何時までもゆかしき心永久にもち
統後に備へる大和なでしこ

・山口怡一少尉の妹筒井純子さん

色褪せし兄のうつしゑほほえみて
懐かしさこみあげ指にて撫づる

天翔けて大空に散りし吾が兄は
現代の平和見守りてゐむ

山口少尉 陸士57期22才第68振武隊、
20年4月9日知覧出撃沖繩へ 次の遺
詠がある。

あられ降る矢弾のふすま何かせん
吾がゆく道は大君のため

・市川尊経少尉の妹二宮弥生さん

遥かなる豊後水道こえしまま
永久に還らぬ君のおもかけ

・市川少尉 予備学生14期22才 回天
千早隊 20年2月26日硫黄島海域

・大石正則少尉の母トクさん

はろばると来し方願れば天かけし
白マフラーの子の笑顔顕つ

大石少尉 飛行予備学生14期22才
八幡神忠隊 20年4月28日串良出撃沖
繩へ、次の遺詠がある。

もろもろの装ひつけて国のため
いで立つ姿母に見せばや

・後藤光春少尉の弟慶生氏の歌

この空よ亡兄も仰いだこの空よ
空は変わらなず何処におわす

後藤少尉 陸士57期22才 第66振武隊
20年5月25日万世出撃沖繩へ
「初陣が最後神明の加護の許に神通体
当りに参ります」

・巽 精造少尉許婚者文子さんの歌

「許婚のままに征くこと許せよ」と
やさしすぎます遺書の筆跡

巽少尉(前出)

・岩井定好伍長の父

国の為散りし我子にはげまされ
老ひて再び土にいそしむ

・岩井伍長 少飛15期20才 第106振
武隊 20年4月13日知覧出撃沖繩へ

・天野三郎少尉の父天野敬三氏

悠久の大義に生くと三郎は
レイテの敵に体当りしつ

天野少尉 陸士57期22才 一字隊
19年12月5日バゴロド出撃 スリガオ
海峡の敵に突入、次の遺詠がある。

大君の御為に剣取るからは
斃さでやまじ我は死すとも

・根尾久男中尉の父

吹く毎に散りて行くらむ桜花
積もりつもりて国は動かじ

身をもって君に仕えし真心は
吾子ながらも尊かりけり(再録)

・大井隆夫少尉の父

従容含笑赴困難 必死唯期必殺弾
一瞬轟然居醜噴 堪称義胆興忠肝

・市川作

回天

林少尉 幹候9期 第105振武隊20年
4月22日知覧出撃沖繩へ

・市川作

蹶然大意漲於皇土 闕哉出家郷去校庭
鬱勃戰意磨入魂技 必死必殺遂回天業

市川作

大井少尉(前出)

・後藤光春少尉の弟慶生氏

特攻の黄金の花よ何を知る

想いを語れ雄叫びを挙げて

後藤少尉(前出)

・伊奈剛次郎少尉の父

時は来ぬ命の狼火あかか

世をとどろかせ振武伊奈隊

伊奈少尉 陸士57期22才 第49振武

隊長、20年5月6日知覧出撃沖繩へ

なお父には次の歌もある

かがまりて粉ひく妻の髪白し

いのちなげうちし子をば語らず

・池田元成少尉の弟研二氏

七八度生きかへりつつえみしらを

攫はむまでは体当たりせん

池田少尉 陸士57期22才 第56振武

20年5月6日知覧出撃沖繩へ

命だに惜しからなくに惜しむべき

ものあらめやも君が為には

○肉親は語る

・義烈空挺隊のある遺族の談(昭和51

年5月24日沖繩摩文仁の丘に義烈の

碑を建立除幕式を行い、多くの遺族

が参列した。そのときの一場面)

「その日は突入から三十一日目にあた

る。遺族五十余名、戦友約百名、それ

に自衛隊空挺隊員約五十名は、沖繩の

北飛行場跡を訪れた。

あの紺碧の洋上に、ひしめき合っ

ている敵艦船にむかい、わが特攻機は真

一文字に突込んで行ったのだろう。

台端にある民家の庭に咲くハイビス

カスの紅は、流した血汐によって彩ら

れているのかもしれない。

一人の中年の婦人が、付添の若い自

衛隊員に語りかけた。

「お蔭様で兄が戦死した場所を弔うこ

とができました。遺骨の代りに紐の切

れた靴と落下傘の紐

が届けられました。

今日はここの土を遺

骨の代りに持って帰

ります。

兄は戦死したとき

確か二十三歳でした

が、貴方と同じ位で

はないでしょうか一

「僕も二十三歳です

が、昔の人は偉かっ

たです。自分にそんなことができる

だろうか」

「私の息子も同じ年です。息子をみる

と時々兄のことを思出します。兄が休

暇をもらって帰省したのは、四月の

十九日でした。そのとき落下傘降下の

話をしてくれましたが、特攻隊になっ

ていることなどは少しも言いません

した。一晩母と三人、父の仏壇の前に

枕を並べて寝ました。翌朝村外れまで

見送って別れましたが、それが最後で

した。一ヶ月後義烈空挺隊のことが大

きく新聞に出て、間もなく兄の戦死公

報が届きました。」

この婦人の言う兄とは、金山清軍曹

のことだった。

話を聞いた自衛隊員は、二十三歳と

いうことに強く心を打たれた。

(「帰らぬ空挺部隊」より)

・名古屋空第一草薙隊時任正明少尉

(海軍飛行予備学生13期)の姉の手記

(「白雲に乗って君還りませ」特攻基地

第二国分の記」より)

(前略)

眼を閉じると、今も尚昨日の事の様

に耳許によみがえってくるあの声、あ

の笑い声。

出撃の前夜だった。

「姉さん、いよいよ征きますよ。亡兄

さんの処へ。後を頼みます。しっかり

後を頼みますよ」

と何時もと少しも変わらぬ、否それよ

りもつと落ち着いた静かな声が、はる

かに遠く受話器にひびいてきた。

出撃の前夜、それは四月五日の夜だっ

た。廿三夜の月とて、餅をつけて武連

を祈る夜だった。

役場の小使いさんが、真夜中急に

「時任さん国分の息子さんから電話で

す」

と知らせ下さった。

先に父が起きて行った。しばらくし

て「息子さんがお発ちになるそうです

から、お母さんもきて下さい」と、ま

た小使いさんが呼びに来られ、母も行っ

た。最後は祖母と私だった。国分の息

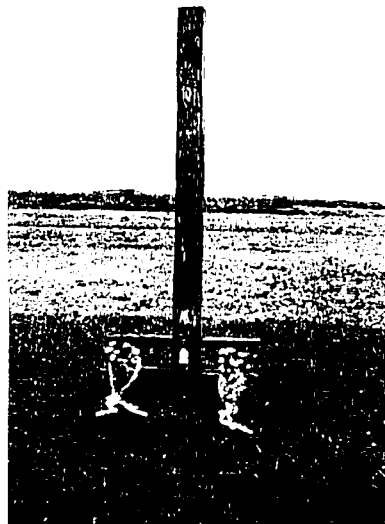
子「何か心に解せないものがあり、弟

からだろうかと思ひ、まさか、と亦打

消しつつ、月明かりの薄明るい中を、



靖国神社特攻の像



読谷飛行場跡

私は智子を抱き、祖母は当直の方にたすけられつつ役場まで歩いて行った。そして、「明朝早く沖繩に出撃する」という弟の声を聞いた。

真夜中の静まりかえった部屋の中に、祖母、父、母、それに私、思い思いの音が受話器にすがる。夢の中にいるような気持ち、だが夢の中の登場人物にはまだいくらかの感情がある。しかし、電話の前に並んだ私達には、感傷も感情もない。まして涙もない。只心残りなく征かしてやりたい、精一杯励ましてやりたい。その気持ちだけが、頭の中でたえず渦巻いていた。

最初父がたった。「正明か、征っておいで。家の事は何も心配いらぬよ。立派に戦っておいで。成功を祈る。決して見苦しいことのないように……。」と言った父に「お父さんですか。何も思い残すことはありません。満足です」と答えたと言う。

次に変わってたった母に、元氣のよい声で

「お母さんですか。この前、いろいろの送りもの有り難うございました。友達も皆大喜びで頂きました。今日は午後一時頃国分に着きました。明日は発ちます。お母さん、お体を大切に。おばあさんはお元氣ですか」

ちょうどその時、祖母は風邪気味で寝込んでいましたが、「お元氣ですよ」と答える

「正ちゃん、いよいよ征きますか。元氣で行って下さい。明日何時に発ちますか」と申しましたところ

「時間は申されませんが。荷物を農学校に頼んでありますから受取りに来てください」

「それではこれからすぐ行きます」

「来られても面会はできませんから、飛行機でも見送ってください」

と答えたという。心急ぐまま祖母を当直の方にお願ひして、一足先に部屋にはいつていた私は母と代わった。

「正ちゃんね。元氣でお行きなさい。家の事は何も心配いりません。心残りなく戦ってください」

「有り難う。姉さん、明日はもちろん生還は期しません。義人兄さん（在満州）、良子姉さん（青島）も遠く、傍

に居るのは姉さんだけです。万一のときは、おばあさん、お父さん、お母さんを頼みますよ。しっかり後を頼みますよ」

「大丈夫、大丈夫」
父も母も私も、他の言葉を忘れたもののように、同じ言葉だけを繰り返して

ていた。

当直の人に手を引かれ、祖母もやっ

と辿り着いた。七十を越して、足元もおぼつかなくなった祖母は、母に支えられて電話の前に進んだ。父が傍らから

「おばあさん、これが正明の最後の電話ですよ。よく聞いておきなさい。涙声を出さないように……。」と言った。

吾と吾が心を支えるように、祖母は生まれて初めの受話器をとった。

「正ちゃん。明日は発ちますか。行っておいで。そして元氣で帰っておいで」と。そして後は「ウウ……。」とうなるような声になった。それに答えた弟の言葉を私は知らない。父が「おばあさん、もういいですよ」と代わった。

七十有余年昔風に育ち、陛下への忠義」という事を無上の光栄と信じ込んできた祖母は、いつかは征かねばならぬということ、常に私たちから聞かされ、覚悟はできていた筈、そしていよいよ明日発つという今、精一杯励ましてはみたものの、廿余年育んだ、

断ち難い孫への愛情は、叶わぬ望みと知りながら「元氣で帰っておいで」の一語に万感を託した。年老いた祖母のことばをどうして女々しいといえよう。

「それでこそおばあさんです」と、かえってその心を労わってあげたい様な気持ちにおそわれた。(以下略)

・第50振武隊多々良政行少尉(特操1期)の母の手記。

昭和二十年五月二十日午後七時十分「ワレットツニウス」

の無電を限りにあの子は身につけたものの一片さへ残さず愛機も共沖繩中城湾の上空から戦艦に突入したので。その事実を事実としてうべなう心の底から、まだ何処かにあの子は居るよう

で、一千里、二千里、地球の果てまでもたげね求めたならばあの時のままの姿が見られるようでこの五年間をあの子の死の实感がしっかりつかまれば、ままた過して来ました。

(中略)

「皇国を守る者は自分達である」とかたく信じてあんなにも当然のことのように若い生命も、胸一杯の希望も絶ちがたい肉親への愛情もすべてをきづなをふりきって、あんなにもほがらかに征つたものを母の私がなせ涙を見せられましよう。あの子の心を心として

「此の度の御奉公こそこの世に生まれて来た政行の使命であったのだ」と励ましたものです。

火にも水にも母はいましたと共にあり心おくせず征けよ我が子よこの時ぞ命捧げて死ねと言ひし母の心の深きかなしみ

歌を書き添えた日々への便りに私はあの

子の覚悟をたたえこそすれ母の心の悲しみは露ほども知らせたくなかつたのです。あの子の死がこんなにも惨めな結果になった今でも

「あの子はあれでよかつたのだ。信じた道を信じるままに進んだのだからあれでいいのだ」

と亡き子への悲しい愛情の中からも私は私一人の心の中であの子がえらんだ死を恨む気にはなれませんでした。

あれから五年思っても見なかつた種々の世相を見て来た今でもそうです。

大いなる喜びが我に来たるともこの悲しみの消ゆる時なし。現身にこれが最後と床二つ並べて汝とい

寝し思出

小学校から中学校更に専門学校となが、い学生生活に終止符を打つと直ぐに自分から進んで飛行将校への道を選び特別操縦見習士官として家を出る頃にはすでにあの子には戦の重大さがよくわかつていて自分自身が行くべき道もちゃんと覚悟が出来ていたのです。

おろかな母はそんなことには少しも気づかないで二十一のあの子と十九の次男と二人を軍人として同じ日に送り出すことに有頂天になっていました。

大君の御盾とならん男の子二人もちて軍國の母となりたり

愈々家を出る前夜何気ない様子でい

つも私に話しかける調子で

「お母ちゃんは人間の死をどう思う？」とききました。その言葉の中に何となく真剣さを感じて私が平素から死と

いうものに対してもっている信念をそのまま答えました。

「僕と全く同じ考えだ、これで安心して行かれる、お母ちゃんは大した哲学者だハハ……」

と大きく笑いましたが

「自分が死んでも母は決して取り乱してなげくような事はないから安心して征かれる」

と後になって其時のことを戦友の一人に話したと聞いて生きてかえらぬ覚悟で家を出た深い決意を知りました。

残して行った日記の一節に

「祖國のある限り個人の死はない生きるとして死ぬ……」高き精神崇高なる現実我にこの意気あり諦観にあらず宗教に非ず空虚なる議論の結果に非ず只斯の崇高なる精神により近づくんとする現実の精神なり」

死の高さまで自分を高める為にどれだけの苦しみをやんだ事か、現実のすべての欲望から切った心境に至るまでのあの子の苦悩を思う時私は涙なしではいられません。

(以下略)

・八幡神忠隊大石政則少尉(海軍飛行予備学生14期)の母の手記

(前略)

丁度その折、娘、禎子の夫、竹内大尉が朝鮮光州航空隊から諫早航空隊に転勤になり、夫妻で私の家に立寄っておりましたので、

「政則ちゃん、あなたの居場所がわかつたのでちよつと竹内夫妻に会って来て、直ぐに戻りますからね」と、

出撃の気配を感じなかつた私はうっかり申しました。

政則はそうしなさいと言つうように黙って深く肯きました。

私は後に知つたのでございますが、竹内大尉は特攻隊長を命ぜられておりました。

同じ海軍軍人であつた政則は早々とこうなることを予想していたのでございましょうか、自分の妹に軍人の妻としての一の時の心がまえをその遺書とになりました日記にも書き記してございました。

妹思いの政則は娘が私と久々の対面をどれほどか楽しみにしているかを心の底で思つていたのでございます。それが「お母さん、行つてらっしゃい」との無言の返事だつたのです。そのとき、政則は自分が「明日、出撃」と知つていた筈ですが、私には一

言もそのことを申しませんでした。

おそらく、自分と両親との別れの悲しさよりも自分の妹が親に会う欲びの方を考えていたのでございましょう。

その朝、私達は前の日と同じように旅館の玄関へ隊に向かう政則を見送りに出ました。

外は霧雨でした。「お母さん、雨が降っているから此所まででいいよ」

道まで出ようとする私達を政則は手で押えるようにして言いました。

「お母さんはまた直ぐここに戻つて来ますからね」

これが私が息子にかけた最後の言葉になりました。

そのとき、「お母さん、明日は出撃です」と一言洩らして呉れば私は何事も描いてもそれを見送るまでいたのでございますが、息子は私の嘆き悲しむことを心配し、また、妹を欲ばせて上げたいとだけ考えていたのでございました。

旅館の前の道を真つ直ぐに歩いた政則は曲り角に着いたとき、初めて私達の方を振り返り、煙るような雨のなかで長い長い拳手の礼をいたしました。軍服の肩に雨が粒になつて光つてい

るのが私の目に映りました。これが私達が息子、政則を見た最後

の姿でした。

一神風特別攻撃隊八幡神忠隊、昭和二十年四月二十八日、沖繩周辺ノ敵艦船群ニ体当り攻撃ヲ決行ス」

息子、大石政則海軍大尉の戦死は海軍布告にこのように記されております。

今日の日本は世界中の国々が目を見張るほど栄えております。その日本のなかで政則と同期の生き残られた方々は立派な社会的地位を得られて国の繁栄を支えて下さいますが、ことあるごとに「戦死した僕等の仲間が叱咤激励して僕達を日本の復興にふるい立たせたのである」と申して下さいるのを聞き、私は息子の戦死は決して無駄ではなかったのだと思ひ直しております。

生き残られた皆様は私も遺族に温かいお心遣いをなさって下さり、毎年、懇ろな慰霊祭を行って下さることに英霊達はどれほどか喜んでいらしたことかと遺族として感謝申しあげております。

その方々も私が九十六歳を迎えますと同時にひとり残らず還暦を迎えられました。「益々お達者で国のために働らき下さい、国のために散って逝きました息子をはじめ、沢山の戦死された方々がそれを願っておるのです。」と、この老いの口から申し上げ、おねがいいたします。

私もまだまだ永生きをして折あることに息子の想い出話をつづけようございます。

皆様、私の長い想い出ばなしにおつきあい下さいまして、ほんとうに有難うございました。

はろばると 来し方願れば 天かけし
白マフラーの 子の笑顔顯つ

九十六歳の誕生日を迎えて
大石トク 平成二年二月 佳日



九七式艦上攻撃機

母と子

この記事母を憶う心で始まり、母の憶いで終ることになったが、もう一度始に戻って、戦没特攻隊員の母に寄せせる至情をもって結びとしよう。

・佐藤新平曹長 仙台乗員養成所7期
21才 第79振武隊 20年4月16日知覽
出撃沖繩へ

佐藤曹長には留魂録と題する日記が残されている。その一節
お母さん江

思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、又何時も不平ばかり言ったり。眼を閉じると子供の頃のこと、不思議な位ありと頭に浮んで参ります。

悪いことなどすると神様に謝らせられたり、又幼い頃「今日の良き日を守り下さい」「今日の良き日を有難うございました」と毎日拝神のことをや

かましく言われたお母さんでした。今日になり本当にあの頃からの母さんの教育がどんなにか新平の為になつた事でしょう。病気で心配をかけた、又苦学の時も随分と心配をおかけした

り。苦学と言えば、家を出発する時、台所でお母さんが涙を流されたのが、東

京にいる間中頭に焼きついで、あの頃どんなにかかえりたかつた事かしれませんでした。

お母さんの本当の有難味が解つたのは東京へ出てからでした。あれから余り家に居る事もなく、ゆっくりお母さんに親孝行をする機会がなかつた事だけ残念です。

軍隊に入ってお母さんにお会いしたのは二度です。一度は去年の休暇、二度目は去年の暮近く館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

態々長い旅をリュックサックを背負つて会いに来下さったお母さんを見、何か言うと涙が出そう、遂、わざわざ来なくても良かったのに等と口では反対の事を言つて了つたりして申し訳ありませんでした。

あの時お母さんと東京を歩いた思い出は、極楽へ行つてからも、楽しいなつかしい思い出となる事でしょう。あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ今年新平が奉られるのですよ……。手をつないでお参りしましたね。今度休暇でかえつた時も、お母さんは飛んで迎えに出して下さいましたね。

去年の時もそうでした。日本一のお母さんを持った新平は常に幸福でした。

小雨の降る夕方、お母さんと一緒にかこちゃんのお母さんのお墓参りをした事、愛国婦人会の事で在郷を一緒に歩いた事、天神様へ成績の御知らせに行った事等楽しい思い出は次々とつきません。

特攻隊の事も早く知らせて呉れ、ば、手紙でも出して激励してやったのに、とお母さんは残念がるかも知れませんが、お母さんの気持ちは新平解り過ぎる位解って何時も感謝して居りますから、余計な事を心配しないで下さい。私としてはどうせ直ぐ解る事ですから、早く知らせて心配かけてはと思っで知らせなかつたのですから、悪く思わないで下さい。

リウマチや、神経痛に充分注意して、天から与えられた寿命だけは絶対に生き延びなければいけません。
 文夫、洋治もお母さんがよく見守って立派な子供になる様鍛えて下さい。
 決して気を落したりして、体をそこねられない様御注意下さい。

〔告知板〕

会報別冊の頒布について

年会費(二千円)納入された方に季刊の会報をお送りすることは、今後も従来通り継続致しますが、協会の活動を更に拡充する為、会報別冊を作成し、特別会費納入者に送付することに致しました。特別会費は御所望の別冊ごとに定めて、お送りした別冊に同封してある郵便払込票を使って納入して頂きます。

4月末発行する別冊は次の通りになります。特別会費は送料別ですので、お納め頂く金額は、これに郵送料が加わります。

・遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情
 A5版 60ページ 六〇〇円

内容は今回の会報に掲載したものと同じですが、活字を大きくして読み易くしました。定期刊行物は読み棄てにされ易いので、このように単行本としました。書棚に飾るだけでなく、身近な人に回覧する等、遺徳顕彰に御協力願ひ度く、上梓しました。

・特攻隊員の日記

A5版 70ページ 七〇〇円

これも既に会報に掲載したもので、

宛義隊若杉是俊、第64振武隊森高夫、回天多聞隊佐野元、第79振武隊佐藤新平、勳皇隊山本卓美、以上五士の日記を再録しました。

序文にいう「死を目前にした特攻隊員は、現世に何かを書き残しているもの、そのうちで遺書と銘打っているものは、宛先の人にも申ししている訳で、勿論心情を吐露していることに間違いないが、自由闊達に心うちを述べるという点では、日記には及ばないように思う。また日記はその間の行動と、それに伴う心情を知ることができる。しかし、日記を丹念に書き続けることは誰にでもできることではない。従って入手できる資料は貴重なものである。日記とはこのようなものであります。一度季刊の会報に掲載されたものであつても、改めて単行本として収録したものを読み返してみますと、戦没特攻隊員の心情がひしひしと胸奥に迫るのを覚えます。

会員の皆様、どうかこれらの小冊子を手になされ、多くの人に戦没特攻隊員の精神を語り伝えて下さい。それが最大の慰霊であります。

このような会報別冊は次々と発行致します。「B-29との戦」と題するものを目下印刷中として、次の季刊会報で紹介致します。

靖国御祭神の

手紙・遺書特別展

遊就館で12月25日まで
 特攻隊員のもの多数あり



忘れがたい人たち 回天⑤

小灘 利 春

川久保 輝 夫

鹿児島県。海兵72期、回天搭乗員。昭和19年9月大津島に着任、同年12月回天特攻第二陣の金剛隊伊47潜に乗り出撃、ニューギニア北岸ホーランドディアの敵艦隊に突入して戦死。海軍少佐。

川久保輝夫少尉は昭和19年8月、海軍潜水学校第12期普通科学生の発令を受け、続いて第一特別基地隊の大津島基地に私どもと一緒に転属となり、回天の搭乗員になった。

回天作戦の第二陣金剛隊の伊号第47潜水艦で昭和19年12月25日、彼は大津島を出撃、遠くニューギニア北岸のホーランドディアに集結する敵艦隊の攻撃に向かった。

が海軍中尉になって、偶然にも折田少佐の艦に、搭載回天の先任搭乗員として乗り込んできたのである。

十八日間の進出航海中、潜水艦は洋上を漂流する筏に行き遇った。グアム島守備隊の海軍軍人八名が、米軍に島を占領されたあと海上を迂回し米軍上陸地点を攻撃しようとして手製の筏で乗り出したが、海流に押し流されて十二日ものあいだ筏に乗ったまま漂流を続けていたのである。

「オジさん、頼むからあの八人を助けてやってくれ。われわれ四人はあと十日目で確実に死ぬんだ。四人の代わりに八人が代わって生還するのはめでたいことです。着る物はわれわれのものを持って下さい」

無事に帰れる保証がない、長途の決死作戦の途中であったが、それで艦長は決断し、八人の漂流者を収容した。

一月12日の黎明、港の北四漕半の地点から四艇が発進した。直ちに浮上し全速避退に移った潜水艦は約一時間後、大きな赤橙色の閃光を視認した。ホーランドディア基地指揮官は全艦船あて潜水艦警報を連送しはじめた。

戦後判明したところでは、輸送船「ボンタス・ロス」号に回天が命中、しかし頭部の一・五五トンの火薬はその瞬間には爆発せず、少し離れて大爆

発を起こした。船体に斜めに命中したためかと思われる。輸送船の横腹には回天頭部が激突した凹損が残っていた。他の各艇もそれぞれ付近で爆発したという。

彼は小柄であるが肝は太く、冷静な意見を常々と述べた。大津島基地が開隊した当時34名いた上官搭乗員のなかでは背が最も低いのに、いつも人の輪の真中にいた。貫禄は一番であった。昭和20年の元旦を熱帯の海中で迎えた伊47潜は、乗員の文芸作品を募集した。審査の結果、川久保中尉が作詩した「沖の島過ぎ祖国を離れ、敵を求めて浪万里……」に始まる「回天金剛隊の歌」が一等に入選し、艦長賞のピールを獲得した。この歌は陸軍の軍歌

「流沙の護り」の替歌で乗員の愛唱歌となった。目標地点に到着し、搭乗員がいよいよ回天に乗艇する前、潜水艦乗員は全員でこの歌を合唱して壮途を送った。

川久保中尉の家庭は鹿児島島の典型的な軍人一家であった。父上は旅順攻略戦で負傷した陸軍大佐。子息六人のうち、若くして病没した長男と幼少の六男以外の四人がすべて海軍兵学校に進んで戦死、少佐に進級した。家族に軍人を多く出した所謂「軍国一家」は数

多いが、一兄弟四人が戦死して、揃っ

て海軍少佐」というのは稀ではあるまいか。父上の深い感慨はつぎの一句にこめられている。

子等はみな 国に捧げて 秋の空

五男である彼、故川久保輝夫少佐の名は鹿児島市内草牟田墓地のなかの「川久保家之墓」に兄弟の末尾に並べられ、そのあとに父上の名が刻まれている。



金剛隊伊47潜記念写真
二列目向って左が川久保中尉

渡辺 幸三

東京都。慶応大学、兵科三期予備士官、回天搭乗員。回天特攻隊水隊伊47潜で昭和19年11月20日、ウルシー泊地内の敵艦隊を攻撃して戦死。海軍大尉。

慶応大学経済学部在学中に志願して海軍兵科三期予備学生に入り、水雷学校魚雷艇学生として艇長訓練を終えたのち必死必中の新兵器要員の募集に応じて水中特攻部隊の第一特別基地隊附となった。

訓練基地に決まった徳山湾の大津島に昭和19年9月1日、本部の建築がやっと間に合って木片や砲筒を手で払いのけながら入り、大津島分遣隊が開隊した。5日から人間魚雷の操縦訓練に入ったが、肝心の兵器が只の1隻も到着しないため、当分の間は試作品の3隻だけを懸命に遣り繰りしながらの遮二無二突進するような回天隊のスタートであった。

任命されたばかりの我々搭乗員たちが、出来たての新兵器の運動性能をしらべ、手探りの操縦方法開発、改善であったが、第一の難問は回天の隠密潜入、すなわち飛沫をあまり上げないで素早く水に潜ることであった。分遣隊

指揮官の、歴戦の潜水艦長板倉光馬少佐が実に口やかましく要求された。

エンジンの起動を確実にするため「速力20ノット、深度5米」にセットして発動する規定になっていた。重量83トンの回天を浮力100キロに調整してあるが、操縦席の搭乗員が発動桿を押すと、いきなり20ノットの回転数に上がる。しかし艇は停止状態のまま艇尾を持ち上げ、プロペラが空転して真白な大飛沫を猛烈に飛ばすばかりでなかなか潜らない。それはかりか、艇首が左へ左へと、どんどん向きを変えてゆくのである。

なぜ左に曲がるのか。毎晩開かれる研究会で早速この問題が採り上げられたが、誰も発言する者がなかった。そのとき、ほっそりとした少尉の搭乗員が立ち上がりて静かに意見を述べた。「二重反転プロペラの前の方は右回り、後ろが左回りである。艇が頭部を下げて潜入をはじめるとき、まず前のプロペラが水面下に入る。その羽根が海水を叩く力は、より浅いところで反対方向に回る後ろのプロペラよりも強い。そのため潜り終えるまでのあいだ、艇尾を右に振り続けるのである」

一同は納得し、「お互いまだ日が浅いのに、観察眼の鋭い人物がいるものだ」と感心したが、そのスマートな搭

乗員が慶応出身の兵科三期予備士官、渡辺幸三少尉であった。

なかなか潜らずに飛沫を高くあげ、左に廻ってゆくという、水中奇襲兵器として致命的な欠陥も、原因が判れば対策は簡単であった。「深度ゼロ」に設定してエンジンを発動、海面上を走り始めて速力がつき、尾端の舵が充分に効きだしてから深度を5米に変えれば、艇は直進して飛沫も上げず、滑らかに潜入してくれるのである。

戦後になって、渡辺さんが慶応大学のヨット部員であったと聞き、なるほどと合点した。人間が操縦する魚雷という、空前にして絶後の乗物でも、海上作業の熟達者であればこそ操縦上の障害を直ぐに見抜いたのであろう。

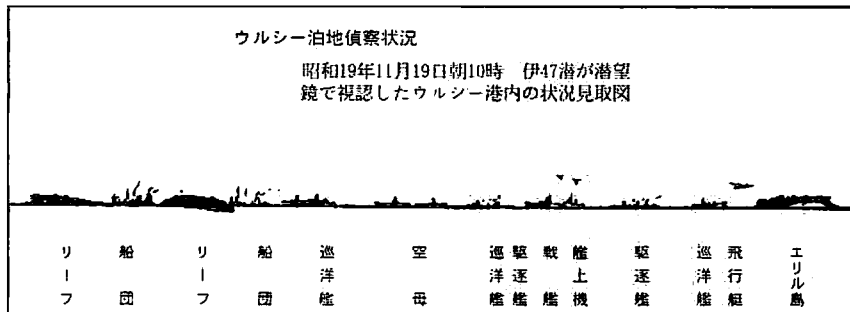
淡々とされた明快な説明を隣で聞いていた私には、渡辺少尉の気品ある端正な横顔と、身についたシーマンシップが今なお消えぬ鮮やかな印象となっに残っている。

艦隊告示をもって「武人の龜鑑」として全軍に布告され、二階級特進の榮譽を受けた。

特攻隊遺詠集に収められた渡辺幸三大尉の遺詠は
身はたとひ 敵艦橋に砕くとも
御国安かれ 兵(つわもの)われは

ウルシー泊地偵察状況

昭和19年11月19日朝10時 伊47潜が潜望鏡で視認したウルシー港内の状況見取図



エリル島	飛行艇	巡洋艦	駆逐艦	艦上機	駆逐艦	巡洋艦	空母	巡洋艦	船団	リーフ
------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	----	-----

吉本健太郎

山口県、海兵2期、回天特攻第一陣の菊水隊に選ばれ出撃したが発進出撃せず、第二陣の金剛隊伊48潜で再度出撃、カロリン諸島ウルシー島の敵艦隊泊地に突入。

故・吉本健太郎少佐は回天特別攻撃隊の最初の出撃搭乗員に選ばれ、第一陣菊水隊の伊号第36潜水艦先任搭乗員として昭和19年11月8日徳山湾の大津島基地を出撃し、西カロリン諸島の敵艦隊集結地に向かった。

しかし20日未明、ウルシー環礁を目前にしていよいよ発進するとき、白艇が潜水艦の架台に密着したまま離れず、彼は空しく内地に引き返した。「発進できずに帰還した搭乗員は、その理由の如何を問わず再び出撃させることなく、後進の指導に当たらせる」内規が当初あったが、彼は第一特別基地隊司令官の長井満少将に強硬な直訴を行った。却下すれば白決すると判断した長井司令官に許されて、続く第二陣の金剛隊の伊号第48潜水艦で出撃、再度ウルシーを目指した。

攻撃予定の20年1月21日早朝、米軍の泊地指揮官が発令した警戒警報が傍受された。その日の夜に入っていたのち、

伊48潜は敵の哨戒機に見えられ、米対潜掃討隊の攻撃を受けた。三日におよぶ交戦のち伊48潜は1月23日遂に沈んだが、回天が泊地を攻撃する場合は黎明時に発進するので、吉本健太郎中尉、豊住和寿中尉、塚本太郎少尉、井

芹勝美二曹の四基の回天が既に潜水艦を離れたあとでの戦闘と判断される。しかし今なお状況が確認できない。彼は朝鮮北部の平壤第一中学校から兵学校に入り、卒業後重巡洋艦の「利根」に続いて「高雄」で勤務したのち19年8月、潜水学校第12期学生を発売された。講義が始まる直前に再度の転勤命令を受けて第一特別基地隊附となり、私どもと一緒に大津島基地に着任、回天の搭乗員を命ぜられた。

色浅黒く眉秀でた、笑うと白い歯がこぼれる好男子で、サッパリとした気性の彼と、大津島基地の急造バラックであった本部の二階で私は同じ部屋で起居した。

任務を達成した瞬間、自分の肉休は微塵となつて飛び散り、生命がこの世から消滅する人間魚雷である。泊地攻撃の回天隊では、作戦が決定したときから出撃搭乗員は自分の生命が断たれる日付ばかりか時刻まで決まっています。自分か現世に生きています。それはあと何日か、いつでもきっちり数

えることができる。

それでも精神教育的なことが別段あるわけではないし、同期生の会話も爽やかで明るい話ばかりであった。生死をどう考えるかとか、特攻を志願したかなどの重い感じの話題は誰も取りあげない。特に彼は難しいことは一切抜きで、訓練以外は朗らかな談笑ばかりの日々であった。女性への憧れを語ることも時にはあった。

戦後、潜水艦の乗組であった或る期友から聞いたところでは、菊水隊作戦から呉に帰還したばかりの吉本中尉とたまたま一緒にになり、「このまま命を捨ててしまつて心残りではないのか」と訊ねたところ、彼は昂然と、「俺は『身体強健、いかなる激務にも耐え得る。最も危険な配置を志望する』と申告書に書いて提出した。それを認めて与えられた現在の任務は、俺にとって本望である」と答えたという。

人間魚雷であれば、制海権、制空権を奪われ破壊の淵にある日本の国土、民族を護るのに最も役立つであろう。その意義ある任務に選ばれた喜びは、自ら生命を断つことの本能的な苦痛をはるかに上回るものである。彼の胸中は戦後になって初めて耳にしたが、進んで死地に赴く意義を明らいたが、進んで死地に赴く意義を明らいた

ちひとり考え抜き、凝縮させていた

のであろう。

出撃前の両親宛ての遺書に、「二十二年間、誠に清き楽しき人生を送り、またここに無上の死処を得たる健太郎、誠に果報者にして欣然死地に投ずべく候」と書き残している。言葉どおり「生を享けたその時代が求めた最善」を、明るい雰囲気の中に尽くした彼の人生であった。

身は千々に 血肉の玉と 砕くとも 何か惜しまむ 堀の埋草



伊48潜水艦

騎兵出身の特攻隊員②

田中賢一

前号で幹候9期で騎兵から航空に転科し特攻で戦死した者四名について述べたが、それ以外に特攻戦死者は次の五名いる。

部隊	機種	戦死日
西尾卓三	3式戦	20・4・1
勝又 敬	3式戦	20・4・1
北村 正	98直協	20・4・6
小野生三	98直協	20・1・6
猪股 寛	1式戦	20・6・1

個々の人物について、その言動を伝える資料の持ち合せがないので、所属部隊の行動や突入時の全般状況等について述べる。

敵が沖繩本島に上陸したのは20年4月1日であるが、それに先立ち3月26日に慶良間に上陸し、沖繩進攻は歴然となった。敵が台湾を飛び越え、我が南西諸島の内懐に入ってきたのであるから、これを洋上に撃滅しようとした。たとえ上陸を許したとしても、後続を断てば勝利の可能性ありと考えた。洋上攻撃の主力は航空であるが、既にまともな航空戦力はないので、特攻による艦船攻撃にすべてを賭けた。

九州に基地をおく海軍の第5航空艦隊と陸軍第6航空軍は、聯合艦隊司令長官の統一指揮のもとに戦闘し、台湾の第10方面軍に属する第8飛行師団はこれに協力した。ここに列挙する5人の所属部隊は、たまたまどれも第8飛行師団の部隊である。敵が本島に上陸した4月1日には、海軍航空はその前の九州沖航空戦で戦力涸渇し、陸軍航空は本州方面からの集中が遅れており、航空総攻撃を發動する体制にはなっていなかった。

第8飛行師団では、この日石垣島に進出している飛行第17戦隊をもって嘉手納沖の敵艦船を攻撃した。同戦隊は特攻機(三式戦)八機、直掩機(三式戦)八機をもって出撃した。その中に前記の西尾、勝又の両少尉がいた。中型輸送船一炎上、大火柱二、黒煙二の戦果を報じたが、特攻機七、直掩機一が未帰還となった。

4月4日聯合艦隊は総攻撃を発令した。海軍航空はこれを菊水一号と呼び、陸軍航空は第一次総攻撃と称し、実施は4月6日とされた。使用予定兵力は
特攻 6航軍 五〇機
5航艦 一四〇機
台湾から 六〇機
6航軍 五〇機
5航艦 一四〇機
誠36、37、38併せて26機が新田原を発って、島伝いに南下する様を目撃し

たという記事が、この会報24号に「青航一期生岡部三郎君特攻出撃のこと」という題で、畠山卓次氏の投稿文の中に載っている。余談ながら畠山氏は大日本青年航空団出身の操縦者で少候24期、このときは挺進飛行第二戦隊に所属していた。主題の岡部三郎伍長も青年航空団出身で畠山氏と同期、永らく民間のパイロットとして活躍していたが、後に召集されて予備役の下士官だった。この人のことについては、会報24号と26号に同じく畠山氏の投稿文が載っているので再読願いたい。誠36の特攻戦死者名簿には岡部三郎の名が載っている。

さて、挺進飛行第二戦隊は、20年4月の初め特攻基地徳之島に二回ばかり通器棧や爆弾等の空輸を担当した。二回目に行ったときのことを畠山氏は次の通り述べている。

昭和二十年四月六日、敵の艦砲射撃で通信の途絶えた、沖水良部島特攻基地救援の為、百式輸送機で出動した私は、夕闇迫る午後七時三十分頃、同島近海上空で敵の戦闘機、グラマンに追い捲られていた最中に、今しも沖繩周辺海域の敵艦船攻撃に向かう友軍の特攻機七、八機の編隊を見ました。そのときの模様は前号に出して

もらった拙稿「特攻基地徳之島に空中補給に出撃す」の中にも、ちよつと触れておきましたが、夕焼け雲の下を飛び行くその機影は、少々猫背にも見える九八式直協偵察機であり、脚の出たその姿は、申し訳が無いがアヒルの行列の様に、哀れにも見えませんでした。終戦後もずっと、あの時見た特攻機の機影が、私の脳裏から離れませんでした。

過日ほかのことを調べる為「特別攻撃隊」の戦没者名簿を繙いていたところ、289頁に誠第36飛行隊（九八直協）の中に伍長／岡部三郎／香川／青年航空団／大10／沖繩西方海面／20、4、6という一行を発見し、あのとときの一機が岡部君だったのかと夢かとばかり驚きました。

島山氏の戦後の調査で、あの機影が誠36、37、38の諸像であるならば、当然本稿主題の北村正少尉や小野生三少尉もいたことになる。グラマンにやられることなく目標に到達できたであろうか。挿話はこれまでとし、本論に戻

陸軍航空の精魂傾けた攻撃にも拘らず、戦勢は一向に好転せず、沖繩の第32軍も5月下旬になると首里戦線の保持ができなくなり、29日から31日にか

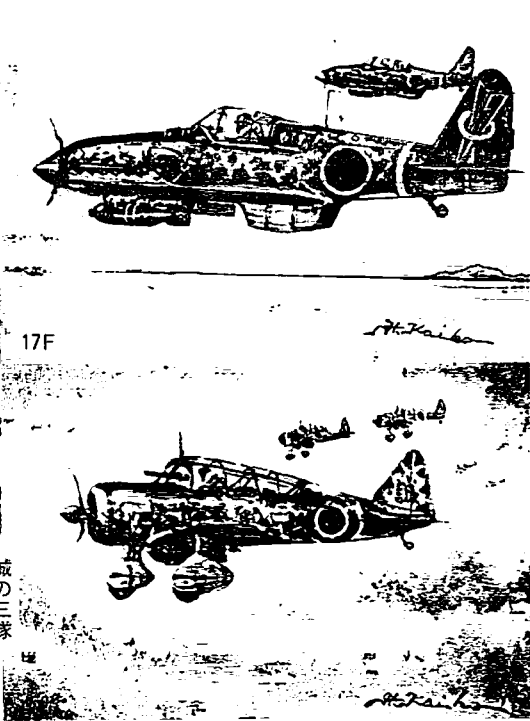
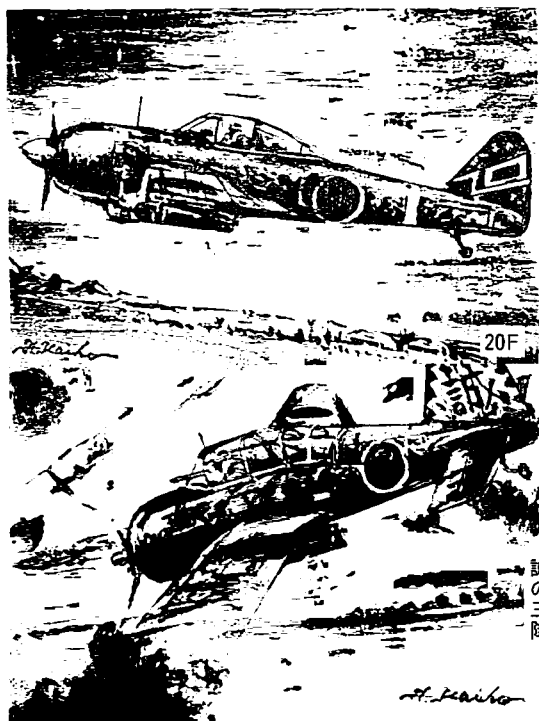
けて島尻地区へ撤退した。第6航空軍では5月28日から第九次航空総攻撃を行ったが、大本営陸軍部は次の本土決戦に備えてこれ以上の航空兵力の損耗を避ける為、沖繩の対する航空攻撃を手控えよるとした。しかし、第一線航空部隊の戦意は一向に衰えることなく、特攻攻撃はなお続いていた。

台湾の第8飛行師団では、中央で編成した特攻隊を新田原で掌握し発進させていたが、第一次総攻撃が終わった以後は、第8飛行師団に所属となつて新田原まで来た特攻隊は、すべて第6航空軍に所属替えとなった。従つて第8飛行師団は手持ちの兵力をもって特攻攻撃を行なわなければならないとなった。猪股少尉の属する飛行第20戦隊は、比島から戻り台湾の小港に在つて戦力回復中だった。機種は一式戦である。

5月3日以降二回この戦隊から特攻隊が出撃している。同戦隊の記録は次の通りである。

6月1日、ふたたび飛行第二十戦隊の特攻機に出撃が命じられた。一式戦特攻二機、猪股寛少尉（幹候九期、宮

城県）と芦立孝郎伍長（少飛十五期、鳥取県）である。芦立伍長は五月二十九日に散華した森弘伍長と同期であったが、さらに若く、昭和三年四月二十



少飛会海法画伯

誠の三隊

五日生れの若鷲であった。

まだあどけなさが残る顔に、日の丸の鉢巻をしめて、夕闇せまる午後七時十分、飛行二十四戦隊の四機の制空掩護のもとに、宜蘭飛行場を出発し、独立飛行第四十一中隊長の新保久信大尉機に誘導されて、嘉手納沖にむかい、敵機動部隊に突入した。誘導機も敵艦を爆撃したが、同乗の国広竹年曹長は、このとき、敵弾により腹部の貫通

銃創をうけて機上で戦死し、新保大尉も、宮古島に不時着して負傷した。



人の性(さが)

日本人に生まれた者が、日本国を守る為進んで命を捧げた人に感謝するということとは、もって生まれた性(さが)であろう。それがその後の環境、就中教育によってあらぬ方向に捻じ曲げられてしまう。

靖国神社や護国神社は、国に殉じた人を祀る唯一の存在である。その前でもって生まれた性の発露である。現に元旦の未明から、靖国神社は参拝者で賑わっている。そして春秋の大祭、お盆の「みたま祭」、終戦の日などには、庶民の群で溢れているが、不思議なことに日本国の最高責任者の姿は見かけない。彼も生れついたときは手を合せ

て拝む性を備えていたであろうが、いっしかそれが薄らぎ、外圧を受けてあらぬ方向に行ってしまった。愛媛玉串料訴訟で、違憲判決を出した裁判官も、成長の途中で洗脳された哀れな連中だった。

孟子は性善説を水に喩えて説いている。人の性の善なることは、水が低きに流れるようなものだ。ところが水を強く搏つて踊らせると、水を飛び越せることもできるし、せき止めて逆流させると山を越えさせることもできる。しかしこれは水の性ではないと言ひ、人の不善を為さしむべきは、其の性も亦た猶ほ是くのごときなり」と結んでいる。(孟子「孟子上編」)

幸せなことに廉ある日に靖国神社に列をなして参拝している庶民の姿があ

る。これが孟子のいう水の低きに流れる現象であろう。わが国は米国に支配された時代以降、孟子のいう水を搏つたり、せき止めたりする力が長年月に亘り加わり、今日のでいたらしくなっていました。

日の丸掲げる事を拒否する教師の組織がある。その教師が国際競技の応援に行つて、日本の選手が優勝して日の丸が掲げるのに反対しているのか。喜んでいられる。それが孟子のいう水が低きに流れる現象である。水の流れるに逆らう行動はやめさせねばならぬ。

〔随想〕

織田信長の故事に 義烈空挺隊出撃前を思う

田中賢一

今川の大军国境を越え、我が出城驚津、丸根の攻撃にかかったとの報告を聞きや、信長は立ち上つて舞つた

人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり
一たび生を得て 滅せぬ者の有るべきや

下天とは佛教でいう三界の一番下にあるもので、下天の一日一夜は人間の五十年に相当するという。従つて人生

五十年は下天の一日に過ぎぬ。何とは

かないものかという意味。

信長は舞い終るや立ったまま湯掛けを食い、馳せ向つた。幸運に恵まれ桶狭間で大捷を博するのであるが、出るときは勿論生還を期さなかったであろう。

特攻隊出撃にあたり、舞をまつたという話は聞かぬが、私は義烈空挺隊健軍出撃前の状況を連想した。この部隊の原隊である第一挺進団の団長中村勇大佐は、既に指揮下にはいないが、数日間健軍に向いて出撃準備を指導した。中村大佐の手記が残っている。

「出撃を夕刻に控え、三角兵舎の一隅幹部室では、奥山隊長と渡部副隊長とが黒白を闘っていた。カツ：カツと平常と何ら変りのない打ち方が、調和のとれた音になって響いている。

すっかり準備を了つた隊員たちは、思い思いに煙草を喫つたり横になつたりしているカツ：カツと無心の音が全隊員に響き渡つてゆく。」

奥山、渡部の両者を知る私は、その景況が思い浮ぶ。禅語に「両忘」という言葉がある。両とは生と死である。また「死なば死ねどなに存ずれば何事も大事なし」である。

あの人達偉かつたなあと今更ながさ思う。

平成11年度事業経過報告

平成11年度事業計画に基づき以下のとおり事業を行った。

1. 慰霊事業

(1) 陸海軍特攻隊戦没者合同追悼式

平成11年4月2日、靖国神社において今回から追悼式と名称と改めて挙行了た。

参列者は政財界要人52名、遺族72名、会員272名、併せて396名であった。

追悼式終了後、私学会館において当協会の年次総会を開催した。

(2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成11年9月23日、世田谷山観音寺において、同寺が主催する第48回年次法要に協賛した。当日は来賓44名、遺族70、会員342名の参列があった。

(3) 全国各地慰霊事業への協賛

- | | | |
|------------|--------------------|---------|
| 1. 4月6日 | 都城特攻隊慰霊祭（最上理事長参列） | 宮崎・都城市 |
| 2. 4月9日 | 鹿屋特攻隊慰霊祭（同上） | 鹿児島・鹿屋市 |
| 3. 4月11日 | 加世田特攻隊慰霊祭（同上） | 鹿児島・鹿屋市 |
| 4. 5月3日 | 知覧特攻隊慰霊祭（同上） | 鹿児島・知覧町 |
| 5. 5月8日 | 特攻殉国の碑慰霊祭（小灘評議員参列） | 長崎・川棚町 |
| 6. 5月19日 | 興亜観音慰霊祭（最上理事長参列） | 静岡・熱海市 |
| 7. 7月3日 | 宝塚遺徳慰霊祭（同上） | 兵庫・宝塚市 |
| 8. 7月12日 | 日本会議百人委員会（最上理事長参列） | 大阪・大阪市 |
| 9. 9月11日 | 楠公回天祭（同上） | 岐阜・下呂町 |
| 10. 10月9日 | 原町慰霊祭（田中評議員参列） | 福島・原町市 |
| 11. 10月9日 | 特操会慰霊祭（最上理事長参列） | 京都・京都市 |
| 12. 10月22日 | 明野慰霊祭（同上） | 三重・明野町 |
| 13. 10月24日 | 水戸つばさの塔慰霊祭（同上） | 茨城・水戸市 |
| 14. 11月2日 | 伊良湖岬慰霊祭（同上） | 愛知・伊良湖岬 |
| 15. 11月11日 | 回天烈士追悼式（小灘評議員参列） | 山口・大津島 |

以上の他、予科練雄飛会慰霊祭、陸軍航空碑々前祭、震洋慰霊祭、若潮会慰霊祭、沖繩学徒慰霊祭、千鳥ヶ淵墓苑慰霊祭、海空会慰霊祭、中攻会慰霊祭、ラバウル・ニューギニア 戦没者慰霊祭に協賛した。

2. 慰霊像建立事業

平成11年3月23日「特攻勇士之像」を建立し、靖国神社に奉納した。

3. その他の事業

(1) 機関紙『特攻』38, 39, 40, 41の各号を発行し、会員その他に配布した。

(2) 特攻隊遺詠集の発行販売

平成11年8月、PHP研究所に発注していた特攻隊遺詠集3,000部が完成した。この内1,000部を当協会にて会員及び希望者に頒布し、他は店頭販売とした。枚数146%。

(3) 会員・吉武登志夫氏著『長い日日』の発行販売に協力した。

(4) 『特別攻撃隊』

本年度頒布 88部 残 96部

以上

収 支 計 算 書
平成11年1月1日から平成11年12月31日間で
(第7年度)


(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 年会費収入	5,000,000	5,049,000	△49,000	
2 基本財産運用利息収入	9,700,000	9,639,521	60,479	
3 特別会費収入	5,000,000	4,932,950	67,050	
4 寄附金収入	1,500,000	3,742,400	△2,242,400	
5 懇親会収入	1,500,000	1,547,000	△47,000	
6 出版事業収入	2,400,000	3,378,890	△978,890	
7 雑収入	20,000	36,840	△16,840	
当期収入合計 (A)	25,120,000	28,326,601	△3,206,601	
前期繰越収支差額	19,580,000	19,751,548	△171,548	
収入合計 (B)	44,700,000	48,078,149	△3,378,149	
II 支出の部				
1 管理費				
人件費	4,750,000	4,739,111	10,889	
旅費交通費	100,000	106,380	△6,380	
通信費	150,000	156,275	△6,275	
会議費	400,000	333,227	66,773	
事務所経費	810,000	807,600	2,400	
消耗品雑費	600,000	495,698	104,302	
什器備品購入支出	150,000	103,267	46,733	
租税公課	70,000	70,000	0	
予備費	△150,000	0	0	事務所経費に充当
2 事業費				
慰霊祭等事業費	21,300,000	20,517,955	782,045	
特攻隊史実調査研究費	200,000	0	200,000	
特攻隊資料収集費	100,000	13,830	86,170	
出版事業費	6,900,000	5,773,597	1,126,403	
予備費	500,000	0	500,000	
当期支出合計 (C)	36,030,000	33,116,940	2,913,060	
当期収支差額 (A)-(C)	△10,910,000	△4,790,339	△6,119,661	
次期繰越収支差額 (B)-(C)	8,670,000	14,961,209	△6,291,209	


監特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成11年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成12年2月2/日

監 事

岡田 耕彦  印

監 事

小松 利光  印